古7188

古今閨中傳畫卷

29-169

凡例

一本書は嘗て中央新聞紙上に連載して江湖に好評を博せしもの今之を訂正して袖珍一冊に編せり。

一本書編成の順序も又新聞連載順に依れり、別に身分等級等に依りたる者にあらず、

一本書は速記文体即ち言文一致にして讀者をして親しく名士に接し、高説を聽くの念あらしむるなり。

一本書校正は極めて嚴密に爲せしも尚匆卒の際、魯魚の誤植なきを補し難し、厚顧の諸彦幸に海恕あれ。

庚子孟春

上州沼田藩

名士の嗜好目次

黒田長成侯……一
歴史○富公の事蹟○富士登山○美術
徳川家達公……二四
相撲○旅行○大弓
福地源一郎君……二七
平家琵琶
岸田吟香君……三九
隷書○硯と筆
大倉喜八郎君……四四
佛像○一中節
馬越恭平君……五七
茶
戸田氏共伯……七一

銃獵（現今の銃獵家○放鳥射撃會○銃器○雉子○雉子笛○狩獵の種類○獵器○獵銃○獵犬○獵期○獵區）
山尾庸三子……九一
金魚
廣澤金次郎伯……九八
自轉車
秋元興朝子……一〇三
京都○圍碁○謠曲○武器○毛利家と秋元家
喜谷市郎右衛門君……一一五
盆栽○能狂言
福岡孝悌子……一二三
古畫
守田長祿君……一三八
古錢
古市公威君……一一五
謠曲

河瀨眞孝子……一六二
歐風の細工
松平正直君……一七三
刀劍
野村素介君……一八三
書
益田克德君……一九三
茶○庭園
渡邊昇子……二〇四
武者修業（各地の劍客○昔と今の差）書畫骨董
田中光顯子……二二四
芭蕉庵
鄉純造君……二三四
印譜（朱肉○蘇子印略○鷄血石と田黃石○印語○鑑識と證印）
板垣退助伯……二四二

相撲(常陸山○梅の谷○國見山○海山逆鉾○本場所と花相撲)
伊藤雋吉男……二五三
茶
伊藤勇吉君……二六八
盆栽
土方久元伯……二七五
旅行○邸宅
曾禰荒助君……二八一
菊○土の拵へ方○菊の作り方○花の種類○外國に於ける菊の流行○菊と薔の別
吉田要作君……二九七
夜會の經歷○夜會の服裝○馬車の客と人力車の客○場所の割當○舞踏場の心得
藤波言忠子……三一二
御料牧場の現狀○下總の牧場○馬の種類○乘馬術
山縣有朋侯……三二三
槍術○柔術○劍と槍○謠曲
渡邊國武子……三三九
蝦蟇が池○運動と音樂○各人の嗜好

名士の嗜好

中央新聞社編輯

黑田長成侯

歷史

凡そ人の嗜好と云ふものは人々其嗜みを異にして居るもので所謂十人十色と云ふ有樣である、ソレデ此嗜好も餘り其度に過ぎると云ふ

と其事柄は好いことであつても亦其性質上害の無いことであつても往々其爲めに悪るい結果を惹起すことがあらうと思ふ。

ソレで一体、自分は何も嗜好と云ふ程のものはないのです、隨分世間では或は演劇を看るのが好きであるとか或は非常に相撲抔が好きで、十日の相撲を十一日見ると云ふ樣な人もあり、それから又中には盆栽、奇石、書畫、骨董、抔を愛翫する人もある、自分も決してそれらの物を愛翫しないのではない、又嗜みがない　ではない、けれども餘り深くそれを嗜好すると云ふことはしない、併し若し强ひて自分の嗜好を申したならば歴史の研究と云ふことが先づ自分の第一の嗜好である、最もそれは比較的に申すのであるが、歴史のことに付ては從來洋行前からも其ことは心懸けて居つて、外國に參つても英國のケンブリッチ大學で政治歴史を專門に修めて明治十七年に洋行を致して二十一年の暮に歸朝を致した、其後も公務の餘暇には歴史上の研究なり探究を好んで其爲めに屢々各地に旅行抔を致したのです。

それで其旅行中に探究した事柄を一々御話するのは甚だ兀長に渉ることであるからして一、二の例を申せば豐太閤の墳墓の如きものも實際の現狀を見て大に感概を起して其後豐國會を盛大に致して昨年目的通りに修繕も出來、大祭典も都合好く擧行したのである、夫から此豐公に關係のある事蹟又豐臣家に親近の人の遺跡抔も其後研

究等を致して漸々世上に現はるゝ樣に相成つたので甚だ善んで居ります、それから又昨今に爲つては菅公の一千年祭も數年の中に迫つて來たのであるが彼の筑前の太宰府の如きは菅公埋骨の靈場であつて全國に菅公の廟社は數へ盡されぬ程ある中に此太宰府は唯今申す樣な緣故もあるから最も神靈の廟社であらうと思ふ、それで此太宰府の神社に於て三十五年の春に一大祭典を擧行することに致してそれ迄に社殿を大に改造し博物場、圖書館等を新設いたし又梅苑も造ることに爲つて居る、そこで此會を菅公會と名付けて菅公に緣故のある諸家又太宰府に緣故のある人々に相談を致して是等の人々も大に贊同を表して皆な奮つて評議員と爲られた、自分に於ては筑前

の緣故もありまするから强て會長に爲る樣にと云ふ依頼を受けて承諾を致したのであります、此菅公の事蹟に付ても目下考證又は菅公の著述したもの或は菅公の詩文集などに付て時々調査を致して見たが其中に大に世人の未だ熟知しない事柄抔もありまするから其要點丈け摘んでお話しませう。

菅公の事蹟

◎菅公と武藝　一体菅公は歴代儒家に生まれてさうして鼎位に登られた、王朝時代門閥階級等の制限の甚しい時に際つては誠に稀れに見る所です、儒家よりして一躍して大臣と爲つた人は吉備眞備と菅公との兩人位であらうと思ふ、それで菅公は啻に文學一方にのみ傾

むいて居る人の樣に思はれて居るけれども、其實武藝抔にも餘程優ぐれて居られて殊に弓を彎くことと抔は名人と云つて宜しい程であつたと云ふ話も殘つて居ります、或る時、菅公が師匠の許に參られた所が師匠より弓を彎いて見る樣にと云ふことがあつたので菅公は弓を彎かれた所が百發百中と云ふ樣な有樣であつた、それで師匠も今迄文事の嗜みばかりと思つた所が案外武藝も優れて居つたと云ふて感じたことがあると云ふことであります。

◎菅公と文事　菅公の文事に於ける嗜は世人の能く知つて居る通りのことであつて實に我國の儒者としては德川幕府の興る以前迄にあつては無論第一流の人であるのみならず、千古獨歩の位地を占めて

居つたと思ふ、幼少の時から其道には秀いで、居つたものと見へ、詩も歌も極く幼少の時に名吟傑作があります、それから菅公の詩に巧みであると云ふことは當時東宮殿下に侍して即席に詩の題の出たのを定められた時間の中で澤山作つて御覽に入れたことがあります、其の後又東宮殿下が菅公を召されて此度びは詩の題を二十題も出された孰れも困難の題ばかりであつた、それを菅公は律で以て其極つた時間の中に作つて差上げた、それは現に菅公の詩集の中に載つて居るので疑もない事實である、之を見ても菅公の餘程詩に巧みであつて文學上の才氣の優れて居つたことが分かります。

◎菅公と佛書　それから菅公は又佛書にも餘程眼を晒されて未だ壯

年の時でありますが、佛教のことに付て序論を作られたることがあります、それは今日宗門の方では名文として傳へられて居るものである。

◎菅公の政治上の位置並思想　それから菅公の政治上の位地又其思想と云ふものを御話します、當時は鎌足の事業を成してより以來藤原氏は大に權力を得て居つた時代であるから菅公が大臣に登用されたことは先に申した樣に實に異數のことである、それと云ふも畢竟當時の天皇陛下が餘り外戚の權が旺んに爲つては王室の爲めに不利益であらうと云ふ所からして菅公の如き人物を拔擢されて、さうして藤氏の權を削がうと云ふ譯から命ぜられたるものである、然かる

所菅公と云ふ人は先にも申す通り儒者と致しては立派な人で實に我國の孔子と云つても宜い位の人であらうと思ふ、即ち君子と云ふ方の資性であつて果斷、明敏、或は勇敢と云ふ樣な政治家としては少し不向の人であつたらうと思ふ、菅公の遺誡として申傳へられて居る中に（是は菅公の說ではないと云ふ議論もありますけれどもそれは根據のない、薄弱なる議論であつてさう云ふとが申傳へてある以上は餘程打壞はす道理が强くなければ排斥することは出來ない）

自非和魂漢才不能窺其闗奧

と云ふ一語があります、是は後世儒者の標準とすべき言葉であつて如何程漢學の力があつても日本人の精神に漢學を應用してそれを

實行して往かなければ決して役に立ぬものであらうと思ふ、全く外國の方に呑まれて仕舞つて支那人の樣な考に爲つて研究した所が利益なくして却つて害があらうと思ふ、菅公は既にさう云ふ大方針を示されて居る、德川氏以下の最も有力なる儒者は皆此精神に據つて漢學を旺んに興して居る。

さう云ふ有樣でありますから實に菅公は儒者としては立派の儒者でありますが、政治家としてはどうもそれ程に往くまいと思ふ、夫故菅公も屢々己を省み三度び辭表を提出されたこともあるのであります其辭表の中にも餘り儒家より起つて斯う云ふ高官高位を辱ふして居つては必らず後に禍が起ると云ふことが書いてある、さきのことを

見貫いて居られた、それで彼の三善清行が忠告した時に辭職しなかつたと云ふことでありまするが、是は當時天皇陛下は切に菅公の辭表を御止めに爲つて非常に御信任の渥い所から菅公も決心して倒れる迄王事の爲めに力を竭さうと爲つたのでありますから清行の忠告を用ひなかつたのであります、決して不明の爲めに左遷される樣に爲つたのではない、菅公は疾くより其事を看破して居られたのであるけれども王室の爲めに大に決心をされたのである、殊に清行が忠告の如きは往々人は其正面から看て以て清行は忠告したるものゝ如く思ふが是は當時の事情を穿ち又菅公左遷以後の事實に徵して考へて見ると清行の擧動に甚だ疑ふべきことがある、勿論清行は文事

上のことに付ては菅公と伯仲の間にあつた人であるけれども如何せん菅公の德望に及ばず自分の門下生も中々菅公程の勢はない、其邊の所から菅公と拮抗しやうと云ふ考を起してどうかして之れを除けば己れが之に換はることが出來ると云ふ考を起したに相違ない、丁度其當時時平菅根一派が菅公を排斥せんとし其他餘程人から猜まれて居る際でありまするから清行は之に乘じて彼革命說抔を以て菅公には表面は体好く忠告したのでありますけれども內心は之に換らうと云ふ野心を持つて居つたのであります、それで菅公左遷以後に於ても時平と清行との間柄は益々親密を加へて菅公の門下生抔も京都に殘つて居つた人の幾分は清行の門に就いたものもある樣であります。

◎太宰府貶謫後の模樣　菅公の謫せられた所は榎寺と云ふ所でありまして今其寺の跡丈け殘つて居るのみのことであります、此榎寺と云ふのは太宰府から左程遠くない所で彼の都府樓觀音寺抔も直き其傍にあります、それで當時菅公は太宰權帥と云ふものに貶されたのであります、此職名のことに付て鳥渡申して置きたいのは當時の官制では太宰府に帥と云ふものを置いてある、是は多く親王を以て是に補したのである、其次に權帥と云ふものを設けてある、此權帥と云ふ役は往々大臣の左遷せられた人を以て是に充てた樣な例があります一條抔も此權帥に貶せられて又後ち免されて歸洛したこともあ

る、矢張り菅公も大臣から貶せられて此權帥に爲られた、どうも是は有名無實の職らしい、彼の當時貶謫されたのでありまするから前後の事情から推察すると京都より手當も送られず餘程嚴びしい取扱ひを受けたものと見にる、さうして其稷寺と云ふ狹い所に自分の子供の中極く幼少のものだけ伴はれて全く謹愼の意を表して外にも出られなかつた樣でありまず、菅公には子供が二十三人あつたと云ふ說と二十四人と云ふ說と二十六人と云ふ說がある、併しながらどれが正當の說であるか分り兼ぬるが兎に角餘程大勢の子供があつたに相違ない、さうして其長じて居つたものは引き離して極く幼少のものだけ菅公に付いて筑紫に流された、それで今申す通り蓄へも乏

しくして狹隘の所に住つて居られて日夜目に視、耳に聽くものは觀音寺の鐘聲と都府樓の甍の色だけである、あゝ云詩文に長じた人であり隨分彼地方は古來名勝古跡の多い所であるが菅公は更に散策を試むると云ふこともしない、全く上に對して謹愼の意を表して門外から寸歩も出ない有樣であるそれは菅公の詩集の中に「不出門」と云ふ題で作られた詩があります。

◎天拜山告天のことは嘘　天拜山の頂上で神に禱つたと云ふ樣なことはどうも信が置かれない、そう云ふ樣なことをしさうな模樣も見にない、それに段々後に爲つて來ると蓄へも乏しく爲つて襖の紙は破れ屋根は漏ると云ふ樣に爲つても其手入も出來ぬ、仕舞には米抔

も足らなくなつたと云ふ樣な有樣で身体に濕氣を受けて滿身瘡瘍を發すると云ふ樣な有樣である、さう云ふとも往々菅公自身の詩集の中にある、併しながら決して菅公は天子に對して御怨み申す樣な考は毫頭ない、彼の人口に膾炙して居る「去年今夜侍二清涼一秋思詩篇獨斷腸。恩賜御衣今在」此。捧持毎日拜二餘香一。」の詩を見ても天子に對して怨みを含んで居つたと云ふ樣なことのないのは明かである、併しながらさう云ふ苦境に陷つたものでありますから僅々數年を出でずして終に病死されたのであります。

それで菅公の死後のことに付ては種々荒唐怪誕の異說がありまして或は紫震殿に落雷したとか、それから間もなく當時の天子が崩御

に爲つたとか云ふ樣な種々なことがあります、斯樣なことは固より取るに足らないことでありますが併しながら妙に暗合した出來事が重なり來つた所から多少朝廷公卿等に於ても顧みる所があつて、それで北野の社と云ふものが京都に出來た、それ計りでもあるまいが菅公の門下生も隨分殘つて居るので旁々出來たのでありますが主として一般の恐怖心から菅公を祭らうと云ふことに爲つて北野の社と云ふものは實は出來たのでありますが、後世に於て聖廟と云ふまで尊崇されて朝廷の二十二社の中に加へた位であります、太宰府の方は眞の菅公埋骨の地であるゆゑ社の建物の下が全く菅公の墳墓に爲つて居るのであります、實は太宰府の方は其邊から考へても一層崇敬し

なければならぬものと考へます、それで菅公を祭るのは北野の社の如きは今申す樣なことで起つたが畢竟菅公の德が偉大であつて名敎上に裨益する所が多くして人として高潔なる行を終始一貫したのであるから其德望の隆んなる矢張後世の我々をして尊ばしむる所以であらうと思ふ、普通の臣下の社は別格官幣社以上にあるものは眞に稀である獨り菅公のみと云つても宜らうと思ふ、太宰府北野共に官幣中社に列せられて居るのであります、それで菅公の位も當時は右大臣と云ふことを罷められたけれども後に至つて朝廷の御尊崇からして太政大臣正一位と云ふものを贈らるゝ樣に爲つた、それで今日に到る迄天滿天神と云へば全國各地到る所之を崇敬しないものはな

い、それで此度の菅公會の事に對しても世人の同情を惹くことが必らず多からうと信じて居るのです。

富士登山

唯今申しました通りに自分が旅行を致すのは歷史の研究の爲めに旅行するのでありますが又時あつては名山大川を跋涉する樣なこともあります、昨年は富士山に登つたのであります丁度山上で一泊をしました所が極暑の際であるにも拘はらず深夜に至ると非常に寒氣を覺えて寒風が壁を貫ぬくやうな有樣であつた、當時は同縣人で野中至と云ふ人が先導を致しました此野中至と云ふ人は先年から富士山巔の氣象觀測を致したいと云ふ志願で今其事の計畫中であります、

未だ其目的を達し得ないと云ふのも畢竟家屋の構造の不完全から起るのでありますから將來其構造を完全にして十分に冬の寒氣にも耐へられるだけにすれば必らず目的を果さらるゝことゝ思ひます、高山の觀測と云ふことは宇内に於ても極く稀れなことでありますから若し此人にして其志望を達したならば獨り氣象學上のみならず全体の學術の上にも裨益するとが多からうと思ふ、

美術

自分は一体美術と云ふとは平素嗜みは致さないのでもない、併しながら最初にも申した通り餘り嗜みも度に過ぎて所謂耽けることに爲ると大變害がある、之を適度に致せば最も高尚の樂みであらうと思ふ、美術の中でも殊に詩は高尚のものである。

詩は美術中の美術と申しても宜しいものである、それで旅行などを致して英雄豪傑の遺跡を弔ふたり、好風美景に接した時は詩を賦することがあります。

其他の美術も好まぬのではないですけれども詩ほどには嗜まない、勿論、名工の畫いた繪畫とか或は名匠の手に成つた有名の彫刻とか、それから音樂其他の美術に於ても其最も著るしいものだけは好む譯である、唯過度に之を嗜むと云ふことは避けて居ると云ふ譯であります、現に京都奈良地方に於て繪畫彫刻を探究したこともあります、併しそれは殘務以外博物館の吏員が調査すると云ふ樣なことゝ

は違ひますが一個人として之を調査することは餘り人に讓らぬ積りである、さうして傍ら代々當家に所藏して居る處のものを取調べる參考に供して居る、矢張り閑暇の折りおどには當家の道具なども取調べて居ります、此度び筑前に參つたならば未だ殘してある什器も澤山ありますからそれを此度び悉く調査して眞贋を判ち玉石を區分する考へであります、甲冑刀劍類の武器も歴代のものがすつかり殘つて居ります。

近頃の繪畫を談ずるものゝ間には應擧容齋の類が大變流行する樣であるがア、云ふものを珍重しては眼識が低くゝはないかと思ふ、佛畫などに大變善いものがあるが其畫工の信念が畫其物に移るからである、どうも昔と今とは畫工の腸が違つて來たので其氣韻が乏しい、依頼心があつて自信力の薄いには嘆息である、精巧緻密と云ふことは決して悪るくはないからそれの改良も宜しいが毅然たる精神と眞面目の考を以て眞相の所に改良を加へて行くことが肝要であろうと思ふ浮世畫などは士君子の珍重すべきものではないと思ふ、威嚴と審美との兩美を兼て居らぬければ、上乘の繪畫とは云へぬと思ふ。

德川家達公

相撲

此間黒田(長成侯)さんから御話がありましたが自分には別に是と云ふ嗜好はないのです、ヤア淡泊に何が嗜好だと云へば相撲位のものである、其相撲も外の人の樣に誰を贔負にすると云ふことをしないから是迄家の抱へとか出入にした相撲は一人もない、又或る格段に力の強い相撲とか巧者に取る相撲があつてそれを愛するとか贔負にして其相撲が負けたからと云つて腹を立てると云ふ樣なこともしない、隨分相撲好きの人に依ると自分が贔負にする相撲が負けると腹

を立つて跡の相撲を見ずに歸へる人もあるが自分はそんなことはない、嗜無茶に相撲を見るのが好きです、近衛(篤麿公)は自分よりは餘程相撲道に巧者である、併し議長(貴族院)に爲つてから閑暇もないのでさう思ふ樣に見られなくなつたらう、黒田の老侯は大層相撲が御好きであつた樣だが今の長成侯は餘り好まれない樣に見受ける、常陸山と梅の谷は豪らい人氣だね、ドチラが先に横綱になるか未だ分からぬ。

旅行

旅行は一番身體の爲めに好い樣である、自分は多年季節に拘らず遊志が起ると各地に遊んで好風美景を賞する、今年もドコカに行かう

と思ふて居るが未だ行先は極らぬです。

大弓

静岡（慶喜公）では大分大弓が熾んであるが自分は大弓も嗜まない。嗜きな話と云つても此位のことですから自分の言ひもしない、おまけを入れて書いては困まるからそのことは斷つて置きます。

福地源一郎君

平家琵琶

此間は御尋ね下すつたつて留守で失禮をしました昨今漸く京都から歸つた計りです……ナニ名士の嗜好を御書きなさるッて、そりや面白うどすな、私の嗜好……左樣さ酒も好き金も好き女も好きと露骨に云つて仕舞へばそれ切りですが、先づ私の嗜好なのは平家琵琶です。

一体私の亡父が琵琶を遺つたものですからな……親の事を云ふのは可笑しいが私の親父は私より學者で長州の人で長府に生まれ長府で

學問して萩でも學問して夫から江戸に出て來て修業をしましたが江戸で意を得なかつたので大阪に行つて篠崎小竹の門人と爲つて小竹の塾頭と爲りました、小竹先生は山陽先生と大變親密な間柄です、所が山陽先生は琵琶が嗜きで能く遣つたさうです、平家の中に濱戰と云ふ段があります、夫は何でずる新中納言知盛の子息の知章が父に代つて討死すると云ふ段である、ソコを山陽先生が好んで遣つたさうです、夫で小竹先生も平家を語る樣になつたさうですが所が面白くないものですから誰も聽き人がない、夫を亡父は謹んで聽いて居つたさうです、是は何でする亡父は假名書の文章が嗜きだつたからね、或る日先生に『ドウしてソンナ面白くもない誰も聽き人のないものを御語りなさるか』と聽くと先生の云はれるには『平家物語の文章は能く吟味すると餘程面白いので暗誦しやうと思つて居つたが其後琵琶法師の語るのを聽いて尙更面白いので夫から平家を語る樣になつた、御前も己の弟子と爲つて學問をする樣に爲つたから平家も語つたら宜からう』と云はれて亡父も遣る氣になつたさうですが終に志を果さなかつたさうです、夫が基ゐで私も遣ることに爲つたのです。

それで私も種々假名書の本を文章の御手本として讀みましたが、其中私の最も感心したのは新井白石の藩翰譜です、白石の文章は大變好いと思ふ、其後段々本を讀んで見ると、先生の敬慕するのは白石

に相違ないと思つた、夫から平家物語を讀みました、所が御話變つて舊幕府の時分に本所の總錄邸に月に一回づゝの平家の會がありまして盲人が語りますのを聽きに行つた、未だ其外に一つの緣がある、夫は舊幕府の町奉行をした筒井肥前守と云ふ人がありました、彼の人は其前長崎奉行を務めたことがある、私の親も長崎に居つて懇意に爲つたので私が江戸に來た時分に親の添書を持つて筒井を尋ねたことがある、其後に爲りまして筒井は外國奉行になりました、私も其外國奉行の支配下と爲つて大變筒井に愛されました、彼の人の指南は福住檢校と云ふ盲人でした、此人は石岡檢校の門人で琵琶法師の一人であつた、ソコで段々心易くなりまして度び〳〵福住檢校の琵

琶を聽聞に行きました。

夫から御維新に爲つてから明治の左樣さね十二三年頃でした、成島(柳北)と二人でフイと平家の話が出て『謠も面白くない義太夫も面白くない』と云ふ話に爲つたが其時分福住檢校は熊谷の方に行つて琴の師匠をして居つた、江戸に殘つて居るのが原口喜雲(盲人名は春の市)と云ふて福住の同門なんです、此人が赤坂に居るのを尋ね出して、私だの成島が聽いたのですが、如何にも面白いので『此高尙の平家琵琶を失ふのも惜しいから謠を替古するより之を替古しやうぢやないか』と云つた所が成島は遣らなかつた、私は一人で替古しだして原口にも福住にも敎つたのであります、所が山陽先生の嗜

まれたのも無理はない、始めは何でもない文章と思つて居つたが段々永く語つて居ると大層發明するとがありますな、文章の上に音の囃しがある、鶴屋南北と云ふ狂言作者がありませう彼の人の師匠で名は忘れましたが『狂言作者は是非義太夫を語らなければならぬ、上手下手は構はぬ澤山語りさへすれば宜しい、義太夫は大抵三十段も語れば澤山である、巧く十五段語ればそれで飯が食はれる、之に反して狂言作者になれば幾段でも語らなければならぬ、義太夫を語れば狂言を書く時分に大變助けを爲す』と云ふことを云つたと鶴屋南北が云つたことがあるさうです、それと山陽先生の平家を語つたと云ふのも同じですね、

夫で語ると言ふことゝは平常話をしますとは違ひます、言ふと語ると謠ふとはそれ〳〵違ひます我國上古に於ては語部と云ふものがあつた、普通の口を利くよりは少し違ふらしい、夫で此語部と云ふものは上古猿女君と云ふものから出た、此猿女君の先祖は即ち天鈿賣命であります、其以來朝廷は此猿女の制ですね、即ち禮典を預かる今の式部官です、是が昔の歴史を記臆する、天子樣が少し遊ばされ方が宜しくないことがあると此猿女君と云ふ女の役人が出て『左樣のことを遊ばしましてはいけませぬ、上代は斯樣でありました』と歴史を語つて御意見を申上げたものである、大臣其他要職に在るものに非行があつても意見をする、それが語部ですね、ソコデ今日大將

節のときも語部と云ふものが出まして上古の歴史を語る、ドンナ節で語りますか私は存知ませぬが……其後此語部の儀式も段々廢れたので和銅四年に小野安万侶に勅して稗田の阿禮に語る物を書かせられたることがある、即ち古事紀に

於焉惜舊辭、之誤忤正先紀之謬錯以和銅四年九月十八日詔臣安忤撰錄稗田阿禮所誦之之勅語舊辭以献上者

とあります。

夫れで一体古事紀と云ふ書物は字を見て讀む書物ではない、語つて聽くのです、其證據には文字の内に句詞が付て居る然る所此語りと云ふものも書物が出來るに從つてなくなる譯でせう、けれども未だ

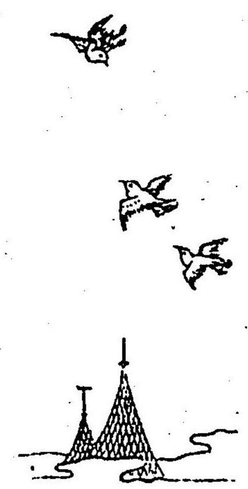
名のあるものゝ出たのは竹取物語、伊勢物語、源氏物語等の如き物語と云ふのが即ち語りなのです、既に源氏物語の序を見ると云ふと大齋院樣と云ふ天子の御叔母サンがあらつしやりまして上東門院の所に何か珍しい物語があれば書いて出せと云ふ御沙汰があつた、所が此大齋院樣と仰せられるのは御婦人であらつしやられて御歩行も御自由ならざる所より新らしい物語を拵へて御覽に入れるとになつて紫式部に仰せ附られて出來たのが源氏物語です、斯う云ふ譯のものですが、語ると云ふことは其後になつて段々なくなつて既に義太夫を語ると云ひますけれども語る所はありませぬ、皆謠ふ樣になつた、清元でも常磐津でも皆謠ふのです、獨り平家と云ふものに語と云も

の、一部分が殘つて居る、即ち白聲と云ふ文がある、此所は素讀みにしても少し節がある、所が今から百年前に尾張に萩野檢校と云ふ人がある、是は平家中興の名人であつて大變學者であつて、此人が種々調べた中に『白聲と云ふものが上古の語りの節である、是は大事にして誓古をせねばならぬ』と云つた、ソコデ能を持つて來まして合の狂言であります、合の狂言で語りますることが前して後しての間に出ます彼れを語りと稱へます夫れで幕府の時分琵琶法師の方では右の白聲は急に敎へませぬ仲々喧しいものであつて十段も二十段も誓古を積んだ上でなければ敎へない、獨り幕府の狂言師が琵琶法師の所に敎はりに往けば此白聲ばかり敎へる、何となれば能の語り

に必要であるからです、して見ると平家の白聲と云ふものは昔の語りの由緣であらうと思ふ、私は近來白聲と云ふ言葉を日本の朗讀法として傳へ樣として頻りに遣つて居ります、私の朗讀法は平家物語の白聲を重にして云ふのであります、

只今では此平家はドウも面白くないものですから誰も遣り人がありませぬ、ドウも此文章を書く人はドウしても謠ふ語ると云ふことは一通り腹へ入れて置かなければならぬ、祝文を讀むとか祭文を讀むとか云ふ場合には人の耳に訴へるから調べが附かなければいかぬ、夫れには平家を語るとイクラか助けをするであらうと思ふ、ドウも文章と云ふものは何か一つ語るものか謠ふものを知らむければなり

ませぬ、謠曲で語ると違はぬのは、能の言葉ですね、夫れから義太夫の臺詞も七五七なら直ぐ調べが附いて『何か何して何とやら』此處を能く研究すると文章の調が附いて人に讀んで聞せて面白みを感じさせることが出來ます。



岸田吟香君

隷書

私は別に是ぞと云ふ嗜みはありませぬ、謠だの義太夫などか昨今流行して居る樣ですが一向メンナ樂みはない方です、マア嗜好なことゝ云へば書を讀むことゝ字を書くことです、書物の方は日本の新聞と支那の新聞を閲るので喂がなくて困りますが書はポツ〳〵遣つて居ります、私は漢碑……漢時代は皆な隷書ばかりです、隷書の外には字はなかつたのでせう、重に禮器の碑山東省の孔子の廟に在りますがアレを能く習ひました、夫から清朝の鄧完伯のを習ひました

何ぞ習ふに秘傳でもあるか知りませぬが私のは石碑に摺つてあるのを見て習つた丈けです、モウ亡なりましたけれども上海の人に徐三庚と云ふ書家がありました、此人には日本人の中でも就いて習つた人もありまして秋山と云ふ男が門人の中では一番其人の風を能く書きます、ドウ云ふ風にして教へますか孰れ手本を貰つて夫を書いたのを直して貰つたのでせう、支那でもメウ能く書く人許りは居りませぬが看板書きは餘程上手のものでアレなら日本では立派な書家です、一時朝野の間に盛に行はれた長三州アノ位に書く人は看板書きに澤山あります。

日本での隷書家日本人での隷書家は矢張りマア日下部、巖谷などと

云ふ人が良いのでせうな、近來東京市中にも大分隷書が見へますが中には能く出來たのかありますがアトはドウもいけませぬ、アレが(扁額を指し)伊秉綬の書いたものです、此の間大橋が太陽の附錄に十二傑と云ふ本を出しました、其中に日下部鳴鶴先生の書が出て居りますがアレは之を見て書いたのです。

松柏耐歳寒君子有終始

伊秉綬於六堂

日本の隷書家として古い所は知りませぬ、が德川時代では市河米庵……菱湖の方は隷書を書いたのは餘り見ませぬ、小曾根乾堂彼の人

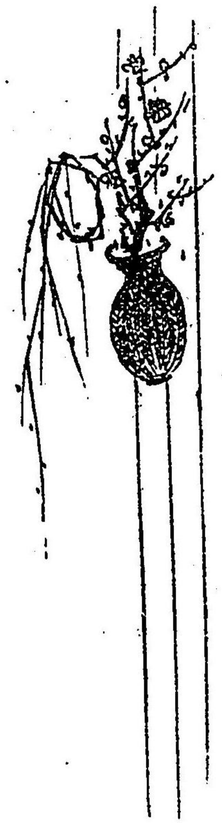
は隷書を書きましたがドウモ甚だ俗ですな、何でも錢少虎と云ふ人の風を習つた樣に聽いて居ります、此錢少虎と云ふ人は矢張り錢梅溪の方の派です、錢梅溪は能く書きましたけれども錢少虎から小曾根邊りになると餘程俗になります、併し小曾根は隷書丈けは米庵よりは宜いかも知れませぬ。

硯と筆

硯はドウしても丹谿が宜うございますな、私も丹谿を持つては居りますが平常は遣ひませぬヨ、筆は皆な唐筆ばかりです、ドウモよい筆は日本では出來ませぬ。

伊藤(春畝侯)さんもハアサウです、書は巧いものです、私は先達九

州へ漫遊せられる前に大磯で鳥渡御目にかゝりましたが漫遊中は中々エライものでしたナ到る所で演說でオマケに大分書かせられた樣に新聞で拜見致しましたが、イヤ書も能く御書きになるし豪氣なものですナ。



大倉喜八郎君

佛像

この佛様に就いての話ですが、私は年來古ひ佛像を愛しまして澤山集めて居ります、佛に就いておもひ出しましたが、先年福澤先生を招待したとき、此座敷の佛像を見られてこういふ話をされました『一体佛像は寺にあれば總ての裝飾ともつり合ッて工合が宜いのだ、俗の家に持ッて來るより寧ろ佛は寺へ置いてそして其寺を助ける方が宜からう』といはれた事があります、先生の性質としてサウ云ふ考へも無理ならぬとですが、私のは違ふ『私の所にある佛は寺から直ぐに引取つたのではない、西京や、奈良邊に現に寺の手を離れて、道具屋の物置の隅ッこにくすぶつて居る佛様を引張り出して、夫れを引受けて斯う云ふ奇麗な所にかざつて、置くので言はゞ佛に助けられるのでなく私は佛を助けておくのです』と笑ッた事がありました、さうしたら先生も『成程それも一の見識だ』とは云はれました、重に奈良時代、鎌倉時代の古佛には昔時の名僧や名工が大層骨を折ッて拵へたものと見えて中々面白い妙味のあるものがあります、

一中節

一中節の話ですが、私は世に云ふ下手の横好きの方ですから知つて居る事だけ話しませう、一中節の元祖は西大谷本願寺宗にして一名

岡本文彌と云ふものです、この人が文彌節と云ふを唄ひ始めましたが非常に美音で扇で拍子を取つて抑揚頓挫面白く遣つたのです、後に伊藤出羽掾と申しました、門人に伊勢の人岡本市太夫といふものあつて後に木屋七太夫と名のり是が木屋節と云ふのを語り出しました、又大阪に岡本鳴渡太夫と云ふ者があつて阿波節を語り出しました、又都越後掾と云ふ人が三代目を相續して之も上手だつたと云ひます、其後須賀千朴といふ人が音曲の妙所を曉つて終に文源節を骨子とし之に阿波節七太夫節半太夫節抔其他數派の面白き節を選んで折衷して之を一中節と名づけ、自分も改名して都太夫一中と名のり江戸に移つて大に門戸を張ッて都の流派を擴めました、此人の門弟

に都國太夫半中といふのがありまして後に宮古路豐後掾と改めまして其の子宮古路文字太夫と共に常磐津一派の節を語り出しました、半中は常磐津豐後掾と名のり常磐津一流の祖となッたのです（當時の名人林中も宮古路を名のるのはこれからです）其後菅野傳彌と云ふ人が松本治太夫と名のつて一中節の三味線を能く彈きまして、世に行はれました、之が菅野派の元祖です。

その後江戸吉原仲の町桐屋新二郎と云ふものが河東節の三味線を能く彈きまして山彦新二郎と名のつて後に菅野序遊と改めました……初代宇治紫文はこの序遊の門人です、この人は最初都一閑齋と名のり淺草材木町に住んで江戸名主の隱居で藝は頗る名人であッたので

す、後に宇治紫文と名のッて一派を開ひたのです、まづ之が都、宇治、菅野の流派が出來た始めです。

夫れでこの一中節と云ふものは謠曲に似寄ッたところもあるので す、狂言染た言葉が多くあります又今樣と云ふものに似寄ッたところもある、その初代の唄ひ擴めた時は三味線も何にもない扇一本で拍子を取ッて……ポン〳〵遣ッて居たのだ、そこで一中節の表題には、都羽二重扇拍子と書いてあります子、二代目になッて始めて三味線が附いた、初代豊後樣は扇拍子で人に聞せられる位であッたから、抑揚頓挫が非常に多くあッて聲も好くて面白かッたらうと思はれます。

夫れで今から二十年前に豊後樣の二百年忌の追善會をした事があります、夫れはたしか、明治十二年でありましたと思ふ、流行し初めた時代は今日からは、凡そ二百四五十年位になりませう、あまたある音曲の中にも一中節と、義太夫とは今日は品の好いものになッて居りますが、先年重野博士が斯ういふ話をされた事を覺へて居ます『昔し太宰純が一中節の事を書いてあッた、どういふとであッたかと云ふに、一体關東には固有の音曲と云ふものがある、極めて古雅なもので、うぶで、雅味のあッたものである、然るに先頃上方から都豊後樣といふものが來て一中節といふものを唄ふて江戸市中で大に流行せた、是れは甚だ淫風な音曲で、厭ふべき節付が多いと思ふ

て居るところへ、その後、また竹本某といふものが上方より下ッて來て義太夫節と云ふものを唄ひ出した、所が江戸の流俗の氣に、はまッて大に行はれる、一中節と義太夫節の二ッが大層流行するを見て、いかに澆季の世なればとて古雅な音曲は廢れて淫風なものが盛んに行はれると、いたく歎息したことがある、今日から見ると一中節も義太夫も音曲中では先づ高尚な部類である、この二百年の間には河東節、常磐津、富本、園八または長唄、清元、新内節などが追々行なはれて、とりわけ清元の如きは聽くに堪へざるひどい文句がある、若しも、これを大宰純に聞かせたら吃驚して氣絶するだらう』と話されたことがあります。

夫れから二代目の時代には三味線を附けて世の中に行はれて居ッたのです、絲が付いてからは芝居にも使ッたさうだが地が一中節で昔の役者が踊るのだから其頃の芝居は面白くなかッたものだらうと思はれます、それでこの文化文政のころに一時清元やら色々な新音曲が盛んな時に一中節は鳥渡廢ッた事がある、その時分、本町に樽屋藤左衛門(江戸名主)と云ふ通人があッて、この人が一中節が能く出來るところから千葉專之助といふものを引立ッて九代目の家元に取り立た、同時代に深川お船藏前に都一靜と云ふ名人があッて樽藤と一靜と、この二人が此流義に肩をいれて骨を折ッた結果大に流行しました、そのころの金座役人、藏前の札差、十人衆抔いふ旦那株の

通人は河東節か一中節をやらなければ交際上肩身が狭まいと言ふやうな有様であッたさうです。

近來迄二人の名人がありましたが何れも故人になりました、一人はお船藏の師匠一静一人は都伊中この兩人でした、一静の高弟で一廣といふのが目今の名人で一静の皆傳をこの人が持ッて居るのですがいまだに讓づるべき門人がないといつて歎いて居るさうです、同じ一中節でも流儀が三ッに別れて居つて、宇治紫文の一派も大に行はれて居ります、又菅野序遊の一派も中々流行して居ッて都初代からの系圖の一卷はさる仔細あッて當時序遊の手許に藏して居ります。

そこで私の稽古したのは横濱に居つた時始めたのです、以前日本橋

の新右衛門町に河村傳右衛門（三十三銀行河村傳衛氏の實父後年迂叟と稱す）と云ふ人があッた、この人は溝口家の用達で、同家の金談などあるときはいつも同席して交際して居りました、ある時一中節を聞いたが中々面白いこれは稽古をしたら出來ないこともなからうと河村の紹介でその頃内藤新宿から横濱へ引越して來た西川といふ師匠がありました、これについて始めましたので、維新以前からだから中々古いのです、當時有名の富貴樓の女將が上方から歸ッて來て横濱に商賣を始めた、其店開きのとき、祝ひに一中節を私がやッたが、何をやッたか今から考へて見ると無邪氣過ぎて友達が嘸そこまッたらうと思はれます、……一体この音曲は人こまらせの我面白と云ふ性質で昔から悪口が多い

……親類だけに二段聞きなどゝ云ッたり……御法事とおもひの外の河東節……

それから維新後大名の藩籍奉還といふ頃は大に一中節もすたれまして、そこで師匠も古道具屋と化ける弟子も一人殖へれば二人減るといふ樣な譯になりました、この時江戸中の旦那株で一中節の好きな人は誰であらうと尋ねると三井組の大番頭で永田甚七といふ人と森村市太郎（森村組の主人）といふ人であッたのです、依ッて三人が寄合ッて、『斯ういふ音曲が丸で廢れて世の中に跡を絶つのは如何にも惜しいものだ、何とかして命脉をつないで置いたなら又流行る時節も來るだらう』と折々相談して再興を計ッた事がありましたが、其内に永

田さんは故人になッたが森村さんは宇治一派に肩を入れて菊地さん（菊池長四郎貴族院議員）だの吉田一家或は小田原屋なんといふ連中が出來て流行して居ます、宇治も菅野も家元は專業にして居る故、門弟も追々殖ますがおしいことには都の家元だけは專門でない料理屋兼家元といふ譯故何分流派が盛んになりませぬ家元が本藝を內職にして勉强せぬのは甚だ心得違ひです、假りにも何の某と世間へ廣めをして家元になッたからは其祖先の名譽に對しても其流派の爲めに一生懸命に藝事を練習せなければならぬのです、たとひ遊藝とは云ひながら一流の祖先となる人の成功する迄の困難辛苦と云ふものは中々非常なものであるといふことを心得、祖先の家名を相續するものは献身的

に修行を積まなければならぬのです、藝人と名のる以上は見臺に向つては武士の戰場に出たのと同じ心得にならなければ一流の名人とはなれぬと思ひます、これは一中節のみに限らず一派の家元たるものは何派にてもこの心掛が肝要と思ひます、大体一中節は近松ものが多いゆゑ文章も面白く、夫に節付が能く出來て居るので至ッて品格がよいのです、いそがしい時なぞ利口な袋を一寸いと棚へ仕舞ッて置いて見臺にむかつて語ッて居る間は世の中の俗事は忘れてしまひます、まるでモヤ〳〵した雪の中に居るやうな心持で自然と腦をなぐさめる利益がありますから、これも衛生の一助であらうと思ひます。

馬越恭平君

茶

イヤ一向私は何も嗜みはございませぬ、茶の話ですか、それは從來から好きで遣つて居ります、此唐紙は永德だとか申しますが、先住が持つて居りましたもので怪し氣なものです、此處の方は土佐家でもありますか誰でございますか書き人が分りませぬが、十七八年頃迄、書畫も隨分ございました從つて廉價にもございまして常信の三幅對が七圓位で買へました。

茶を遣りますには矢張り庭とか茶室とか器物とか軸物とか云ふもの

も皆夫れに應じて吟味するようになります、澁澤さんなどは從來書畫抔は大嫌でありましたが近年大分茶に凝られて大分コンナ物を蒐められるさうでございます、此間も王子の別莊に茶室が出來ましたと誠に場所も宜しうございますし故柏木貨一郎氏が世話をしましたものですから……庭は益田克德さんの手で西京から諸色を取寄せになりました、唯金持の力と云ふ方でなく餘程世話人の丹誠で集めたものでございます。

其節茶室の席開きがありましたが其時の名客は慶喜公（德川）と井上伯とは一所に待合に會して種々お話があつたさうですが僅か二疊か三疊の狹い所で一所になられたものですから自然話が親密に渉つて

餘程甘くやつたと云ふことでございます、私共の呼ばれました日の客人は益田孝、淺田正文、益田英作、下條正雄さんと私で五人でございます、澁澤さんが、自から膳部を持出しました、又其軸物は中峯禪師の墨蹟でございます、横物で珍らしいものでございました、唐の人でございまして書法は丸でペロ〳〵、笹の葉見た樣な字であります。茶人の方では茶碗を喧しく申します、茶碗は御藏張……遠州の藏に這入つて居る品であると申しまして御藏帳の一ッのもので瀨戸天目であります、茶杓が利休、就中面白いのは筒が宗扁です……と云ふ樣な趣向で、其の翌日は大倉（喜八郎）さん近藤（廉平）さんの連中四五名でありまして其後も一、二回お催しに爲つたさうです、凡て此

道は何でございます、石黒忠悳さんや佐藤進さん戸塚文海さんの樣お御醫者樣の先生達が熱心に御遣りに爲ります。

一体澁澤さんは茶なぞは攻擊する方でございまして子々孫々迄茶なんかは遣らせぬと云ふ流儀でありましたが奇態のもので世が變はりますと今迄茶人とか何とか云ふものは殆んど世の中に齡されない樣に云はれましたものですが、所謂美術と云ふ樣なことから茶を遣らなければならぬと云ふことに爲りました、澁澤さんなぞも『凡て軸物にしても道具にしても茶人があつた爲めに幾らか善い物が日本に殘つて居るので若し茶人がなかつたならば大概外國に持つて行かれたであらう』と云ふやうなことから段々數奇心が出たと見にて此頃

では服紗を下げて待合まで客を出迎に出られる樣になりました。

一体東京の庭師では九兵衛と云ふものがありまして故人になられてから八九年にもなりませうが、福地さんが全盛の頃愛しました男で今生きて居れば非常に用ゐられませう、先頃宮内省で御買上になりました後藤さんの庭も此男が造つたのであります、植木師としては近來の名人であります、此男が故人に爲りましてから磯谷宗匠が上京しまた、建築は柏木が上手ですが庭は益田(克徳)さんに敵ふものはありませぬ、益田さんは素人ではございますが今東京第一でございます、大阪の元天滿の與力をして磯谷と云ふ宗匠がありまして隨分庭の方では名のある人ですが或る人の說には『磯谷より益田の

方が巧まい』と云ふ位でございます。

私の此住居は伊集院（兼常）さんが先には住んで居りました此人も中〳〵庭には凝つて居りまして私の代になつても少しも規摸は變へませぬで、ソックリ其儘にして居ります、先年まで伊藤侯のござつた伊皿子の邸も以前伊集院が住つて居りましたものです、伊集院の邸は京都にも二三ケ所ありまして全体建築も上手で庭も巧者ですが皆な益田には及びませぬでございます。

◎茶と料理　茶人と云へば何か薄汚ないものでさへあれば好いと云ふて妙なひねくつた料理を出して御客を苦しめるのが能くあるですが、茶人と云ふものは一番美味いものを喰ふものでございます、隨

分不時に珍客の來た時には裏の畑にある蕗をもぎつて來て蕗の莖を使かひ葉はうでて汁の實に使ふと云ふ所謂手料理にして出すのも清潔にして出せば宜いかも知れませぬが、兎も角東京とか大阪とか云ふ都會に住んで居つて十分に好い料理を食べられる好い料理人もある所に居りながら出入の魚屋の物を買まして、妻君の御料理とかおさんどんの御料理で隨分出すのがござりますが、是は困るのです、マア茶の料理と申しますれば八百善の外はないと云つて宜しうございます、夫に以前は捨藏と云ふ料理人がありましたが、亡くなりました、今は平之助と云ふ料理人がありますが、是はマア隨分上手でございます、唯今は蠣売町に醉月と云ふ料理屋を出して居ります、

併しソコへ往つて喰べたのではイケませぬ、宅へでも呼んで主人が喧しく云つて料理を言附けますと當時の名人でございます。

◎茶と菓子　それから菓子はマア本所の一ッ目に越後屋と申すのがあります、先づ茶人の菓子と云つたら越後屋でなければならぬことになつて居ります、其他本郷の藤村なぞも好い菓子屋であります、それから風月なぞの主人も茶人でございまして、好い菓子も出來ますが、ドウも茶の方では風月の菓子を使ふ人は餘りない樣です。

◎茶と書畫　從つて此茶席の畫は四條派の吳春とか景文とか云ふ樣なものは茶には向ませぬ、土佐家狩野家とか云ふものでなければ向きませぬ、舊い茶人の言傳へに『土佐狩野家のものは謹んで見る宗

達光琳のものは樂んで見る』と云ふことがあります、書も重に名僧抔の書いたものを用ひます尤も煎茶家の方は思ひ切つて高い金子を出して好い物を買います、最初から抹茶でなしに煎茶で味を覺えて夫から後ち抹茶に移ると仲々思ひ切つた事を遣られます、煎茶家の方には絹川屋とか申して鈴木何んとか云ふ非常な大層好いものを持つて居ります人がありますが、華山椿山あたりのものは煎茶の方では非常に用ひられて居りまする。

◎茶と行儀　夫れから茶席では行儀のことを彼是れ申して酷く窮屈の樣に思ふ人もあまりますが、さう窮屈なものではありませぬ、勿論茶席に限らず行儀作法の正しいのに越したことはありませぬが茶席

と云つて殊更に窮屈にするには及びません、胡坐をかくのも宜しい打寛いで遣るのも構ひませぬ、前に申したひねつた料理を喰はしたり何かする茶人に限つて無暗に窮屈なことを云ふのです夫れに茶の會席は下戸にも上戸にも向く樣になつて居りまして所謂酒を飲みたい人は酒を飲み、餅を喰いたい人は餅を喰ふ、夫れに給仕人も居なければ主人も居ない、御承知の通り一人りで物を喰べる程不味いものはないが、隨分若い時なぞは好い女が付いて御給仕でもすれば大きな口をあいて頬張るのは見つともないと思つて遠慮するのは能くあることですが茶の方はさう云ふことは構ひませぬ。

◎茶の流派　千家の表では川上と云ふ宗匠があります、裏では中田宗觀と云ふ人があります、石州流では華族の松浦伯爵、アノ御方の所では年中茶がたつて居ります、眞に御嗜好者であります。

利休は仲々豪い人で餘程智恵があつて隨分横着ものゝ方です、其歌を見ても

いつはりと思ひながらも褒めぬれば
　褒めぬ誠にまさりぬるかな

と云ふのがあります、鳥渡面白うございます。

此節私の知合の人で茶を遣られるのは澁澤、益田兄弟、近藤廉平、加藤正義、淺田正文、安田善次郎さん達でございます、それから前御話申した御醫者の先生方です、前の海軍次官の伊藤雋吉さんも仲々

斯道に堪能な方です、伊藤さんは蘭書を林洞海先生に就いて遣つた人で和學も出來れば畫も書きます し、アノ位博學の人はござりませぬ、そして中田宗觀の高弟で皆傳を受けて居られます、御自分は胃病で茶を飲まれないがチヤントして遣られます。

◎茶の効能　茶は悪い遊びを愼む樣になりまして氣風を高尚に致します、酒食も過度には遣りませぬから衞生のためにも宜しうござります、ドウしても此普通の酒宴でござりますと如何なる山海の珍味を嵬めましても何しても茶の料理には限りのありますもので客をした方でも藝者を入れることもなく家も混雜を致しませぬ、何んでもこの間慶喜公と井上伯と御出逢ひがあつたときその會合は青田を御

目に掛けると云ふ趣向で余程宜かつたさうです、たしか六月上旬頃でした、今日では夜會抔が時々ありまして夫れに往きますれば所謂貴顯の方にも話をすることが出來ますが、ドウも多人數の中で出逢つたのでは落附いた話は出來ませぬものです、然るに此茶と云ふものは狹い所に四五人寄つて顏を合はせるものですから親密に話が出來ます、何んのことはないサウ親密にしない知人と一緒に女郎屋の二階に登つて御馴染になつたのと一般でスツカリ國所を聞かぬでも大變懇意になつて仕舞う樣なものであります、私も何れ其内此八月が過ぎましてから御迷惑にならない樣に一席御招ぎをいたしますから御出を願ひまする。

他に何も御目に掛ける樣なものはありませぬが、千家の名物に梅潛の天神と稱へまして元信が天神樣を書きましたものがありますが御承知の通り元信と云ふ人は書を書きませぬ人ですが是には書があります、私の手に這入つて居りますから之を御覽に入れまする、即ち是でございます、是は代々狩野一家には一幅宛寫がございまする、三井元之助さんの所には探幽の寫がありますし、前田家には常信の寫がありまする、私の所にも益信の寫がございまする。

戸田氏共伯

銃獵

◎現今の銃獵家　綾井武夫……アノ人は餘程銃獵は上手な樣に承つて居りますが長谷塲純孝の方は餘り上手な樣には聞いて居りませぬ、時としては隨分澤山鳥を捕つたこともある樣に聞きますが、段々能く聽いて見ると自身ばかりではない樣です自分が銃獵に出掛ける前に幾許か獵師が捕つて蓄ふて居るのを買ひ蒐めて來るから歸へる時には大變ある樣に見へる、二日も三日も前から捕つてあるから夫れを一緒に一眼に見るのですから大分多い樣に見へますが、其實一

日に澤山捕つたことは是まで聞きませぬ、一度に見ると大變の樣ですが五日も六日も前から捕つたにした所が日割にすれば洵に僅少です。

同族中にも狩獵家は隨分あります、伊達宗陳と云ふ人は是は長い獵者で舊くから遣つて居ります、宗敦の方は鳥の方を遣つて居ります其他は土井利恭、織田信近、伯爵の大村、德川昭武さんなぞです。

◎放鳥射擊會　横濱の人は澤山這入つて居ります私も此間迄這入つて居りました、近頃は東京の人より横濱の人の方が重に遣つて居ります、大森の方は是も私は這入つて居ります、中々盛んの樣です、

◎銃器　銃は十二番十六番が重なるものであります、私は小銃の方

を重に遣ります、擊つものは鹿猪です、日本にては日光の獵場あたりでは鹿は擊ちますが、猪の方は遣りませぬ、西洋では鹿狩は大變少ないのです。

◎雉子　雉子は東京廻りには以前は隨分居つたのですが今は少くなりました、東京から五十里以内の所にては雉子は一日に漸く三羽位しか捕れない鵜とか鷸が多い、渡り鳥は始終居らないからドウしても少くない、雉子、山鳥、鵜、鷸なぞは段々減る方です。

◎雉子笛　笛を吹いて捕りますのはアレは春の盛りの時分三月の末頃から遣ります、大鳥は一日十八羽乃至二十羽位捕れます、是は向ふから鳥が出て來るのであつて擊てば外れつことはないのです、味方

ケ原あたりには元は多かつたのですが今は少くなりました、亦太田原の邊豊橋邊にも多かつたが今は減つて仕舞ひました、横濱邊の獵者は遠方まで能く出掛けます、日本では今日は盛岡邊が一番雉子が多い、此處に參りますには大變往返に時間が掛りまする、向ふに二日も居らうとするには五日も六日も費やさなければなりませぬ、山鵲の天龍川の河縁に來るのは十月の二十日過ぎから來ます、河縁の藪とか或は桑畑の樣な所に來る、段々十一月の末になつて來ると藪の中に這入つて來る、始め此處に居るかと思へば向ふに居る、向ふに居るかと思へば他に居つたりする、寒くなると所が極ります、天龍川とか富士川とか中川とか利根川とか云ふ河の縁に居ります、一

昨年ですが豊橋の山原と云ふ人が捕つたことがあります、其寫眞も見ました、亦内牧と云ふ所がありますが夫れは埼玉縣でソコには藪がありまして今は雉子が二三羽位しか捕れませぬ、山鵲も左程捕れませぬ、山鵲を專門にする方は今大學に居る飯島博士、夫れと土方寧是れは舊い獵者ではない、山鵲は歸へる時には一所に寄つて歸へるのであるから澤山に捕れます。

◎狩獵の種類　狩獵のことは種々御話もありますが、先づ其種類を申せば獵具、獵犬、獵期、獵區です、此中獵具は重なるものです、夫れから獵者には三種ありまして其狩獵の免狀は一圓、三圓、十圓と現在は斯ウなつて居ります、是は獵者の所得稅の多きと少きとに

依つて別けたのです、斯樣に獵者には三種あります、けれども實際は二種に過ぎないので、即ち遊獵と食獵と此二ッです、此獵者中には網を以て專門とするものあり銃を以てするものあり其他種々ありますが、私は銃獵者のみに就いて御話しませう、此獵者の中には銃術の上手なものもあり又銃の取扱ひが甚だ粗漏で狩獵の方法も不案内なる者がありまして夫れが爲め往々人を傷けたり亦獵者自身に怪我をすることが時々あります、斯う云ふ種類の獵者は他の獵者に對しても大變害を蒙むらしめたり其術の拙なきために命中することも少ない、只、疵を付ける丈けです 幸に疵を負はざるも鳥獸を狡猾にします、私は是等の獵者は鳥追者と名けた方が適當であらうと思

ひます、時に依ると此種類の獵者先生が擊出す散彈が霰の如くバラバラと落ちかゝつて來て洵に危險千万なことがあります、併し元來狩獵は勇武な遊びでありますから昔は兵を練る一助ともなつて居りまする、尙武のため運動のためには屈强なものであります、私は獵者の年々增加するのは誠に望むのでありますが併し今申す通り危險もありますから能くソコは獵者が注意しなければ大きな過ちがあらふと思ひます、夫れ故是等の父兄たるものは能く子弟を戒めて先づ銃術を學ばしめ然る後ちに免狀を受けさせる樣に致したいものと思ひます。

◎獵器　狩獵は日本でも種々の方法がありまして昔は先づ弓、鷹を

以て、狩りました、現に鷹は露國等にも行はれますし、歐洲大陸でも昔は飼養しまして其種類は、隼と云ふ鳥、頭に衣切を冠せて置く鳥であります、弓を以て狩獵することは今でも未開の國には行はれて居りますが、弓の外に鐵砲網、ハモ、鵜、媒鳥、其他種々の方法があります或は毒を以て捕ふるものもあります、現今冬分に至れば鴨の類は毒を以て取ることが多くございます此毒は人間には障りはないと云ふことです、或は釣針、蟲、鰌の類を差して置いて捕る法もあります、左りながら此獵具の内、重なるものは網と銃であります、網は多くは商賣的に遣ります。

◎銃獵　銃には種々ありまして昔は火繩銃を用ひ或は石と金槌との

磨擦に依りて火を生じ其發火に依りて發彈する樣なこともありましたが維新の頃には軍銃を用ひました、其時分はまだ散彈がなかつたのですから小鳥を擊つには大豆、豆或は小豆を迄め亦鉛を細く鑄、之を細く短く切り板と板との間に押丸めて用ひたのです、併し先づ多くは實彈を使用致しました、遠距離のものを擊つには却つて宜ろしうございましたが、散彈がない爲めに鳥の飛立つのは擊つことは出來なかつたのでず、只大きな動く鳥を擊つまでゞありました、併しながら猪、鹿等の走馳するものは、實彈で擊ちました、明治五、六年の頃より銃獵が追々に進歩しまして從つて獵器も輸入ました、銃には三連發、四連發或は銃身擊ちにして數發連放するものもあり亦

七彈銃と稱へて一發に七彈を放つものもあります、是等は便利な樣ですが二連發の方が優る樣です。口徑にも大小がありまして從つて用法も違ひまする、先づ十二番十六番を普通とします、近來は二十番を用ゆることが流行する樣です、是は携帶に便利なのと亦銃術の優劣を見るためであります、術が優れなければ口徑の小なるものは甚だ不利益です、一發のパトレーヂの彈藥の分量は譬へば十二番十六番等の銃に比し量が少ない夫れ故比較上遠距離に達しない、亦命中の範圍も狹いからです、散彈にも種々ありまして國に依りて番號を異にして居ります歐洲大陸、或は米國にては先づ大粒を用ひ、英國は小粒を使用する方であります、日本では多く英製のものを用ひて

居ります、銃の大小に依りまして各々利害がありますが是は獵者の經驗によりて良い方を撰むのです、小粒と大粒と同じ量なれば小粒の方が數が多いのですから命中の範圍も自から廣く從つて目的物に命中ることも亦多いのです、狙ひが少々違つても粒の數が多いために甚しい外れがないのですから初心のものにても比較的に獵物が多いのです、又小粒は鳥に大きな疵を附けない、此等は小粒の利とする所です、併し粒の小さきため風によりて方向を變じ比較上彈力少なきため遠方に達しない、假令命中つても遠距離では力が弱いために鳥獸が即死しないで、疵を負ふのが割合に多い、是等は小粒の害とする所です、大粒の方は風のために方向を變ずる樣なこ

となく、亦彈力あるがため遠方に達し、且つ命中れば必らず鳥を撃ち落し亦木の枝葉等にも格別の障りを與へませぬ、是等は大粒の利とする所です、併し前に申した如く粒の數が少ない爲めに從つて命中範圍が狹い、夫れ故餘程狙ひが正しくなければ命中しない、亦命中した所で疵が大きいために出血多く携帶上見苦しく且つ不便なので、是等は大粒の害とする所です、夫れで大粒を用ゆる獵者は術が優れなければ命中が少ないのですから之を使用するものは誇る氣味があります、尤も散彈の大小は式に依つて差異があります、鳥で云へば羽毛の變つた當座、獵の初期、鳥に近づき得る時抔は小粒の方が効が多いのです。

◎射撃　射撃にも種々の法がありまして熟練しなければ自得することは出來ませぬ、併し目的物たる飛鳥走獸は幾分か先きを狙らい撃つことが肝要です、之を狙ひ越しの極意と申します、今試みに獵者の發砲する數を概算すれば獵者を平均十三万人とし一人平均月に兩度出獵するとせば毎日一度十發宛とし六ケ月間百二十發になる之が總數を乗ずれば、二千五百六十万發、彈數一發を六匁とし火藥八分と算すれば散彈九万三千六百貫となり火藥一万二千四百八十斤となる隨分多額なるものです。

◎獵犬　狩獵には犬を用ゆるのと犬を用ひないのとがあります、犬を用ゆる獵は猪、鹿、兎、雉子、山鳥、鵜、水鶏、鷸、鳴等であります

す、就中雉子、山鳥、鶉、水鷄等には犬が必要です、日本でも昔から犬を使用して居りますが、是は鳥獸を追出し又は手負したものを追駈て噛み止めると云ふ方ですが、西洋の使方は之と違ひ只、追出し或は追駈けさせる斗りではない、鳥獸の潜伏して居るのを遠方から教へ又銃殺したるものを自身で持つて來るのです、犬にも其系統の善いのと悪いのとに依つて藝の優劣があります、現今日本で良い獵犬を得ることは餘程難いのです、夫れ故に誰か純粹の犬を歐米から輸入して之を飼ひ之が繁殖を計つて廣く同游者に分つことにすれば實に獵者の幸福です、獵には犬の善悪が第一です、百發百中の名人でも犬が悪ければ充分な獲物は捉れませぬ。

◎獵期　日本では以前は一般に十月十五日より四月十五日までゝしたが、近年は府縣に依り十月一日より四月三十日まで七ケ月とする所もあります私の考へでは將來は今の樣な狩獵の仕方でなく、一年中とし鳥獸の生産時に依り定むる方至當ならんと思ふ、今の規則は恐らく鳥獸の繁殖を問はず田畑に農夫の出づることの多少に依り定めたるものにして農民の多く出づる時には危險多からむとの婆心より出でしものと思いますが、一体獵期を設くる必要は鳥獸の繁殖を計るのです、天地間にある動物なり植物なり皆、時候の寒暖に依りて生産繁殖に夫れ〳〵差違がありますから、一の法を以て臺灣の南端の隅の鳥獸の上にも千島の北端の隅の鳥獸の上にも行ふと云ふの

は甚だ不都合です鳥獸の生産繁殖、時候の如何に依つて精々研究して縣に依り狩獵期を定めなければならぬのです、併しながら餘り細かく分けるのは亦不便ですから先づ全國を通じて七、八區乃至十區までとなし、現今の獵期は取締が餘り緩慢なるが故に東京近傍では期限内に禁鳥を捕り販賣するものあり、田舍では期限などあるとを知らざるものが多いのです夫れが爲めに年中公然狩獵するものがあつても之を咎むるものもないと云ふ有樣である、それから又禁鳥獸の販賣は嚴重の取締ありたきものです、期限内に往々禁鳥が店頭に下がり居ることを見ますが、歐洲では禁鳥獸を射擊するのは獵者の最も耻とする所であつて狩獵中若し誤つて擊ち斃すことあれば罰金

を拂ふは勿論亦獵に拙なきものと言はれて大に哄はれるのです、之に反して日本現時の獵法は何でも、彼でも一時の快樂を貪らむがため捕れる丈捕るが功名の樣に思ひ、時に依つては隨分禁獵鳥をも得意然として擊ち捕ると云ふ悪い風習があります、實に卑劣極まるです。

◎獵區　獵區と云ふのは先づ獵場とすべき適當の場所を其土地の所有主と契約して半年とか一年とか或は數年間幾何の金を以て借受け、其期限内に於て借主若くは其許可を得たる者に限り狩獵して他人には猥に狩獵せしめず場所の四方の境界は標木とか道路とかを以て區

劃するのです、日本には未だ純然たる獵區の制と云ふものはないのです、是は實に缺點です、獵區がない爲めに近年濫擊の結果鳥獸の減少するのは實に著しい事實です、維新前には將軍家を始め諸大名各領地に止場と稱へて獵區を設け地頭の外は何人でも許可を得なければ狩獵することが出來なかつたのです、斯の如く嚴重な取締があつた爲めに鳥獸は年々繁殖して居つたのです、其頃の人々は恐らくは禽獸魚類と云ふものは無盡藏のものと思つて居つたであらうと思はれます、我輩もソンナことを一度夢にでも見たいものと思つて居るのです、其當時は鶴の類も澤山居りました、其頃鳥獸の繁殖を計ると云ふのは無論學理上の考へはなかつたのでせうが、自然の經驗から

知らず〳〵保護を加へ、又現今の如く猥に狩獵するものがなかつた爲めに鳥獸は年々增殖したのです、又以前は國に依つて何々神社の使ひと稱へて鹿、白鳥或は雉子抔の類は其土地では狩獵しなかつたのです、皆大切にして社内に納めるやうな有樣でしたから繁殖は非常なものであつたのです。

然るに今日の有樣は恰も共有物にして我れ勝に捕るのです、若し獵區に制限があれば區の所有物となるが故に容易に他人に濫擊せらるゝ憂ひなく、亦區の主人も自分の物となるが故に永く狩獵を樂むと云ふ心からして十分に繁殖を計り必らず無益の獵をしない樣にならうと思ふのです、所が現今では獵者の增加と狩獵の方法立たざる爲

めに毛種羽族歳を追ふて減ずるのです、其の故に一日も早く之れが保護を計らねば數年ならずして盡滅するに至らうと思ひます、誠に遺憾な次第です、鳥獸の繁殖を計るには如何なる方法に依るかと云へば獵者が鳥獸の生産時期に狩獵せざるのと完全なる獵區を設くるにあるのです、即ち獵期を嚴重にし生産を殖し獵區の制に依りて濫擊を防ぐのです例へば獸物なれば牝及び兒、鳥なれば雛、鷄卵を嚴重に保護發育せしむる事が肝要であるのです。

山尾庸三子

金魚

私はモウ此間から頭が悪くなりまして耳が遠くなりましたから宮中顧問官も有栖川宮別當も凡て御役目は御免を蒙むりまして斯う遣つて居ります、維新前後の話なぞは能く記臆して居りませぬよ、文久年間に井上や伊藤と洋行しまして私は井上伊藤が馬關の變を聞いて一旦歸朝いたしましてからも、矢張り倫敦に留まつて工藝機械の學問を致して居りましてヂプロマを取りましたが、日本人で歐羅巴のヂプロマを取つたのは、私が嚆矢でございます、其後も

ラズゴーの機械學校に這入つて勉強しまして明治元年に歸朝しました。今では何にも是ぞと云ふ嗜好もありませぬが、此頃は金魚を飼つて居ります、是はイツモ宅には尾の長い流金とか云ふものを五六尾たゝきに入れて子供の翫弄にして置きましたが昨年の夏子供を連れて藪下の金魚屋を素見かしに行つて流金の大きい親を一尾買つて來ました、ソコで仙華園と云ふ植木屋の下にも金魚屋がありますから若し御出でなら御供をしませうと云ふから行つて見ました、スルト金鱗と云ふのが一つあつたから夫を買つて歸つた、サウすると其後仙華園の番頭が來て『好い金鱗で皆な幕の内に這入つて居るものを持つて居る人がありますが、今度居る所が水が惡くていかぬから

譲つても宜いと申しますが如何でございます』と云ふから『唯、譲つて呉れても好いでは困る、代價を極めて呉れ』と云つた所が、一尾十圓位だと云ふことでありました、其譲らうと云ふ人は紀州の人で神田と云ふて唯一教會の世話をして居る人であります、其細君は京都府知事の内海氏の姪で、神田と云ふ人は洋行もしたことのある人で伊藤勇吉さんとも心易くして居る人であると云ふことでございます、夫から仙華園の番頭が神田に逢つて其話をした所が『山尾さんなら献上いたしませう』と云ふので更に私の所へ手紙を寄こしましたから私も『喜んで頂戴は致さうが飼養方は能く教へて戴きたい、併し今は冬であるから春になつてから頂戴しませう』と云つて

此春になつてから引取りました、引取つて飼つて見ると中々厄介のもので手の掛ることが夥しい、朝十時頃に餌を遣つて午後四時頃に食ひ終つてから水を換へて遣る、段々飼養法の講釋を聽いて見ると、人間の子を育だてるのも斯う云ふ風に丹誠を盡して注意して養成しますれば必らず良い子が出來るに違ひないと思ふ、金魚は雨が降ると運動しませぬから餌の遣り方も減じます、餘程面倒なものです。

此五月の十二日に卵を生みまして四千七百尾孵化しました、所が神田なんどが來て調べて見て子の惡いものを拔いて四百五十尾計り擇拔き跡は棄てましたが此四百五十尾計りの中、擇に擇つたら好いのは五尾が十尾でせう、宅には豊次郎と云ふ金魚屋が來て世話をして居りますが丸子を育だてますのは普通の金魚屋では遣れぬさうです、東京で丸子の地堀池を持つて居るものは六十軒位なものださうです、ソコデ金鱗と云ふものを育てる家はタツタ二軒ほかない、淺草の龜吉と本郷の丸山に一人り居ります（是より子爵は編著者を伴なひ庭前に下り金魚の飼養池に致り家人に命じて其尤物二尾を拯はしめ小器に移し）是が先づ第一等の金魚で、角頭と申します、一体金魚は木の葉形と申しまして腰の極く落ちましたものを上等と致します、ソコデ尾はしなやかにして尾開らきの宜しいのを上等とします、ソレデ、更紗より赤を上等と致します、夫から未だ見所は澤

山有りますが普通は夫丈であります、是は五歳……、夫から是は六歳でございます、獅子頭と云ふ、先に拯ひあげましたのが雌でございます、後から上げましたのが雄でございます、金魚の雌雄の見分けをするのは水掻きで見分けるのであります、雄は此水掻の鰭の骨が太うございます、雌は細うございます、價は此一と番いで最限はありませぬが五十圓位するさうでございます、金魚の壽命は極く丹誠を宜しく致しますれば十二三年は保ちますさうです、餌は「いとめ」と申します國の人は能くシヽバと申します、水は掘井戸の水でありますと一旦湧してからでなければいけませぬが水道の水なら其儘で宜しうございます、唯今東京で金魚の飼養家は三田の豊岡

町の水野子爵、本所壽町の伊達さん(今は止められたりと)夫から黒田伯もお嗜好で澤山持つて居られます、實母散の喜谷市郎右衛門……是は金魚は澤山持つて居ります、現今東京第一でございませう、併し唯今の所では當家の出來は比類がないと金魚屋は申して居るがドウだか當てにはなりませぬ、私は當時家族を連れて鎌倉の別莊に避暑に赴えて居りますが、五の日と十の日には必らず歸京して金魚の水の入換をして樂んで居ります、貴君方も御飼ひなすつてはドウです幾らもあるから差上げませう、大岡さんにもチットお飼ひになるなら上げますからと御話下さい。

廣澤金次郎伯

自轉車

ナニ、私の嗜好談……突然の御訪問では困るが別に是ぞと云うて御話する程なものはありませぬ、煙草……煙草は好きですよ、併しモウ先に赤新聞に書かれましたから煙草の話は御免蒙ろう、ベースボールやロンテンス、自轉車なぞは大好きです、隨分學習院に居る時分自分は自轉車を流行らせて近衛を困らせて恨まれた方です私は歐洲から歸つて來て四五年になりますが今日ではモウ歐洲では多少廢つて來ました樣です、アレは樂みに一週間に一遍位緩り乘れば倦が

來ませぬが、競爭をして同じ樣に駈けて往くことをすると直きに倦が來ます、偶に二三人で千葉邊へ緩り遠乘りする位のことなら倦が來ませぬ、兎角商賣見た樣に乘るから倦るのです、餘り早く乘るから仕舞には病氣を起します、早く乘るのは運動になるが同時に身体を傷ふて呼吸機を害することが多い、アレは乘り樣一方です、私はポンの運動に乘るのだから早く乘りませぬ、即ち曲乘なぞと云ふことは遣らぬ方です、歐米致る所盛んですが、取分け巴里は盛んなものです、公園なぞに往つて見まするに女が男の服裝を着けて遣つて居ります、夫で日本には亞米利加出來が多うございます、日本出來のとは價段の點に於て半分です、亞米利加の自轉車は宜いに違ひないが

自轉車の害は隨分澤山ございます方です、日本でも双輪會と云ふ會を設けてありますが是には中等以上の人は這入つて居る樣であります、私は自轉車よりロンデンスの方が嗜きです、日本にもあります、此の運動は女にでも出來まする、兎に角少し遊びが贅澤過ぎる樣な氣味はありますが、是は女でも出來るのです、華族女學校あたりでも遣つて居りまする、高等商業學校大學などにもありまする、此頃はベースボールなども大分盛んになつて來ましたが、私はモツト、盛んにする樣に致したいと思ふ、歐洲あたりでは同じ遊戯をしながらも其遊んで居る中に特種の效能がある樣な方法を取つて居るのです、詰り遊戯しながら團結力を強くすることを努めて居ります、夫れでウオトルローの戰爭に奈拿翁の軍を破つて勝たのもイートンやペローの大學校の力であると申す位でありまして凡て遊びの内にも一種趣味のあることを遣つて居るのです、彼方では遊戯と交際と云ふことゝはドコまでも聯絡した考へを盡して居る、夫れから貴族社會で一般上等の遊びはスタツクハンチングと云ふて犬で鹿を狩らせる、道樂であります、錢は掛るが一番面白い遊びです、夫れから打球の遊び見た樣なものもあります、英吉利人は外に出て遊ぶ法を考へて居るが日本人は兎角暇があれば座つて一杯飲む方が宜いと云ふ習慣であるがドウカ戸外で愉快の遊びを盛んに遣る樣にしたいものです、私は此暑中休暇には鄕里山口に赴かうと思つて居りますが先

ブ神戸まで船に乗つてアレから上陸してアトは自轉車で往かうと思つて居ります、其日數は四日間は掛りましよう、姫路で一泊して翌日福山邊で一泊し其翌日は糸崎か廣島邊夫れから德山泊りで翌日は山口に這入ることになりましよう。

秋元興朝子

京都

私は別に藝の事に付ては何も纏つた御話は出來ませぬよ、此間戸田さんから御話がありました。戸田さんは游獵も好き自轉車も上手で中々面白い御話がありませうが私はモウ外務省を罷めてから何となく斯う閑暇に爲つたものですから先達中は京都に遊んで京都の名所古跡中で歴史に關係のあるものを殘らず調べまして書物を著はさうと思つて居ります、兎に角五千幾個所と云ふ澤山な名所古跡を調べるのですから中々容易の業ではありませぬ、隨分汚ない百姓屋に泊

り迄んでエライ目に逢つたこともあります、能く人が申しますが京都には美人が多いと云ふことです、其美人と云ふのは三十二相揃つた美人を云ふのではなく、美人の資格の一要素たる色の白いことを云ふのです。

此京都の女の色の白いことはドウ云ふ譯合であるかと云ふことは一ツの疑問でありまして氣象の關係から來たものか水の清麗なる所から來たものか研究しなければ分りませぬが昔は王朝時代には采女の制がありまして諸國より宮中に采女を擇んで出しましたことなども あつて白拍子などと云ふものを發達させた原因かも知れませぬ、併し私の考へでは今日の所謂美人と云ふものは京都よりは名古屋、東

京の方が多いと思ふ位であります、京都に美人の多い樣に思はれる樣に爲つたのは德川家の始めあたりであつたらうと思ふのです、其事は明かにはならぬのです、夫れで詰り京都に美人が多いと云ふのは美人其物が多いのでなく取廻しの優美なのを云ふたのではないかと思はれまする、田舍の娘なぞが東京あたりに出て來て自然に馴れて取廻しが良くなると容貌が惡くても好く見へるのと同じことではないかと思はれる。

夫れで私が名所古跡を研究したのは日本風でなく西洋風に遣つたのですから私の僻論が多うございまして一纒にならぬか知れませぬが私のは人の見る見ないに拘らず兎に角自分の樂みに仕樣と思つて遣

つて居るのです、兎に角實地に就いて金閣寺だとか銀閣寺抔を見ました所が是は評判程のものでもない、金閣寺銀閣寺と云つても洵に規模が少さいもので隨分私の家の樣な小さい大名にも獨力で出來さうな心持がします、彼の時分足利は衰へて來たもですからアレ丈の力しかなかつたものと見える、彼れで足利の力の一斑を窺ふことが出來る。

兎も角も京都と云ふ所は面白い所で一千年以來の都會でありましたが後鳥羽帝の時代より衰へ始めて其實力は關東に移つた、中央政府の姿をなして居つたのは其前桓武天皇から奈良の朝、聖武天皇、孝謙天皇、光仁天皇の代でございまする、其前は日本の歴史にはハッ

キリ示してありませぬ、餘り薈いことで分りませぬですが、僅かの間に規模が大きくなつた、夫れで日本の開化の基ゐと云ふものは京都であると云ふことは誰も口にする所でありまするが、何が原因であるか一向に分らぬです、凡て宗教美術も皆な京都から發達して國々に及ぼした樣であります。

私が京都に遊びましたのは嵐山嶽山から始めました、嵐山嶽山には二度往きました、北の方は少し殘つて居ります、西に高尾愛宕に三度良峰に五六度往きました南の方は八幡から山崎、笠置其他ドコとなしに大概往きましたが割合に閉口致しました山なゐが多くあつて私は折々癈せば宜かつたと口にしたこともありました亦後で思へば

モット見て來れば宜かつたと云ふ心持も致します。

圍碁

今は古人になりましたが、村瀬秀甫、是は名人でございました、今日では本因坊秀榮が一番强よいのです、碁と云ふものは中々六つかしい一種別のもので外のものとはチョット調子が變つて居ります、詩だの歌だのと云ふものは段々遣つて行く中には上りますが、碁はサウは行きませぬ、天才が重です、謠などは話の出來る程遣らなかつたから深いことは知りませぬが意匠を用ゆると云ふよりは寧ろ勉强の方が重の樣に思ひます、番數を掛ければ自然上達します、其換り一年も休んで居ると丸でいけませぬ、聲は立たなくなるし耳は覺に

が惡るくなる、併し又一年も續いて遣れば直きに元に直ります、第一は耳で其次が咽喉……斯う云ふ樣な依賴する所がある樣に思はれます、御承知の通り字を書くにも指が要り、腕が要りますが、碁に到つては耳だの咽喉だの手だの指だのと云ふ有形の物に依賴するには及ばぬ、無形の頭腦だけに依つて遣つて往く仕事ゆゑ勉强したからと云つて必らず上達すると限つたものではない、其換り一年息めて居つても二年止めて居つても障りませぬ、一種別なものであります、迚も外のものと比較は取れぬ樣でございます、私は能く知りませんけれども、碁と云ふものは七分通りは戰爭であらうと思ひます、戰をする樣な氣味が多うございます、ケレドモ又其中には戰をせぬで

自重して勝敗を決する場合もある、殆んど其有様と云ふものは文明流の戰に似て居る、今日の戰爭は昔の戰爭と違つて利益と伴はなければ戰爭はしない、不利益と認めたなら戰爭は避けても宜しい、或る場合には戰ふ風に見せかけて置いて外交だけで輸贏を決すると云ふ様な工合の所もある、碁も是に似た所がある様でありますが全く碁は戰爭を代表するものであると云ふとも云へない様に思はれる。華族の圍碁家としては將來はドウか知らぬが今の所では初段以上を打つ様な格別堪能な碁打はない様であります、貴族院に京極高典と云ふ人が居ります、是は少し打つ様です。

謠曲

謠曲は中々六つかしいもので私の家でも梅若に就いて代々稽古しましたが私はトテモ纏つた御話は出來ませぬがドウモ謠は器械（即ち樂器）と合はないのが一の缺點であらうと思ふ、それに聲の變化がドウモ六つ位しきやない様に思はれる、何分間合が六つかしいもので、間に太鼓や皷を入れますがそれは言葉に合して遣るのではない、太皷はヤヲの調子で打つて往きまするがドウモ一体に謠ふ節と囃などが合つていきませぬ様であります、何を云ふにも謠曲は足利時代のアリストクラシーでドウモ面白くない、音樂でも美術でも德川氏時代になつてから餘程平民的に進歩して來た様であります。

武器

武器甲冑は當家にはトントありません、恐らく大概の大名にも古るいものはありますまいと思ひます、一躰アレは代々一つヅヽは造るものださうで私の家も先々代迄は造りましたがモウ先代になつてからは作りませぬ、一体私の家なぞは元と里見の幕下に屬いて居つたものヽ様でございます、其時分は如何にも微々として居つた様でございますそれから上杉の幕下と爲り其後ち出でヽ北條氏に人質と爲つたこともあるさうです、それから徳川氏に屬いて始めて大名の列に加つた、其以前は大名と云ふ程の家ではなかつた様に思はれる、大阪御陣の時から後ちでありますから古るいものはありませぬ、足利時代よりモット以前鎌倉時代のものになると面白いものもありますが其以後では見るに足るものはない、私の家は太政大臣道親の末孫であるとか云つて系圖に出して居りますが、ドウモ足利以後の大名は皆な嘘ッパチを書いて出してあるので何が何だか分りやしませぬ、マア毛利家とか何とか云ふ様な五六の大名は格別ですが、其外は分りやしませぬ、私の家にも里見に附いて居つた時分の軍配團扇の様なものがあります。

毛利家と秋元家

私の先代は毛利家の三男を迎へたのであります、忠正公の嫡子は淡路守と云ひ二男を福原越後と云ふて蛤御門の役の爲め切腹を仰付けられた人であります、其次が秋元家を襲ふことに爲りました、即ち

元徳公の兄にあたる人です、彼の維新の長州征伐の當時は私の家も此縁家の關係で幕府から御叱りを蒙つて既に國換にもならうとしたことがありましたが段々二心なきことを訴へ莫大の金を遣つて其御相伴を免れました、併し私の家は徳川氏には非常の恩顧を受けた家でございます、ズット先代には老中を勤めたものもありますが私より三代迄は一向役に付きませぬから上州舘林の表高六萬石（内實は十二三萬石）でキウ〳〵遣つて居りました、併し幕末には老中の班に列しなかつた方が家の爲めには宜かつたかも知れませぬ。

喜谷市郎右衛門君

盆栽

私の家は元禄年間此實母散を創製してより貳百年程連綿して居りますが、色々盛衰がありました家でございます、私が此家を再興致しましたは明治十年でありました。

昔より今日に至るまで不相變賣れて居ります賣藥は餘りございませんが、幸に此實母散は日本全州は勿論近時は支那臺灣東邦までも販路を求めずして追々賣れます、此頃は總て機械を以て調製致さねば間に合ぬ位の次第であります、今日では類藥が澤山ありまして中に

も中將湯などと申すは高木兼寛さんなどの保證を廣告にまで出して居ります、一体賣藥と云ふものは効能は兎に角、直段は五錢か拾錢が止まりで味ひ能き藥が賣藥の本意であります。

私は昔から盆栽の僻がありまして未だに遣つて居ります、下女に水をやらせたり或は月六回位に一人二人の植木屋が參り手を入れて往きますから自然盆栽のことに付いては多少存じて居ります、西園寺侯、伊東男、大隈伯抔も頻りにやつて居られる樣です、夫れで私は昨今金魚の方はトントやつて居りませぬが盆栽の方は頻りに、いぢつて居ります。

私が盆栽を始めたのは丁度明治十三四年頃からであります、其時分

日就社の子安峻、朝野新聞の乙部鼎サンなども遣つて居りました、私は彼是二千鉢ばかりも持つて居りますが、伊東巳代治サンも凡そ千鉢も溜て居るそうでございます、盆栽と云ふものは中々五月蠅ものです、一昨日（十五日）の晩の樣に暴風雨になりますと自分が先きになつて、世話をやかなければなりませぬ、車夫や下女に命令てやりますと果して樹を損じたり枝を折つたりして中々手が掛ります、アノ濱町に仲屋荒井半兵衛と云ふ人がありますが、此人は澤山溜て居りましたが、今日では段々減して今愛藏のものは僅しかございませぬ、漸く十八鉢位しか殘つて居りませぬ。

盆栽も前には漸く小遣錢で買へたのでありましたが今は盆栽と云ふ

と仲々貴くなりました、私は此頃は盆栽を買つたことも賣つたこともないと云ふて宜いのです、只今日では出入の植木屋がチョイ〳〵來て見て往つて呉れます、植木師の中では兩國横網に香樹園孫八と云ふものが頭領であります其子分の茗香園と云ふものは盆栽をいちらしてはゐらいものでございます。

蘭と萬年青と云ふものは一種の慾張草と云つて相場をすると同じ樣なものであります、昨今は靜岡から大阪あたりの方は蘭や萬年青に大分引掛つて損をしたものがあるさうです、私の處にも一鉢二鉢位はありますが養成方は中々むづかしいもので慾張り一方ではトテモ甘くは出來ませぬ、又同じ品は二つとは出來ぬのです、私の盆栽は

自分で樂しむのですから人に見せるとか、人に見に來られるとか何んとか云ふ方は嫌です、人に見せれば冷評されることもありますから……夫れですから盆栽を見せて呉れと云ふて來る人もありますが、私は盆栽が見たければ緣日に往つて御覽なさいと云ふてやります。

此楓と云ふものは日本橋十軒店の樋口數子と云ふ人の家にあつたのです、此人は舊幕の頃幕府の眼科醫を勤めて居つた人で、紅葉山の御殿を通る度びごとに之を鼻紙に包んで持つて來ては幾鉢にも植をて紅葉の寄植と云ふものを拵へたのでございます此樋口と云ふ人は煎茶人で大恩寺前の駐春亭の跡を買つて隱居をして居りましたが故人になつてから後、家政改革のため古物や煎茶器なぞを賣りました時、

に此楓が苔香園の手に渡りましたのを明治十七年に私の手に僅か十圓か十五圓ばかりで引取りましたのでございます、所が妙なもので す此樹が夫れから段々有名なものになりまして幹が細くて白い斑があり枒張りがいいとか足許がいいとか申しまして斯道の人に賞られて居ります、年數は百五十年以上も經つて居りますが此楓の特色は葉があつて見られ紅葉にて見られ落葉して見られまするのが妙でございます。

大隈伯は園藝と云ふ方でアノ方は瑠璃の大鉢なぞを持つて居りまして、今では中々金で買へないものがございますが、夫人は大變に盆栽が嗜きて居られる樣です、伸屋の荒井の家には海棠の有名なもの

を持つて居りますあれは元朝顔屋の丸新が緣日師の時分に買求めたので所謂堀出しものでございます、大抵緣日で賣りますものは一種別なもので水を掛け体裁を能くしてありますが家へ持つて歸つて漸く三日も置くとヂキ枯れて仕舞うと云ふのが多いので、今の海棠なぞは洵に稀なものであります。

伊東巳代治サンは大層竹が嗜きで竹の培養にかけては中々上手だと云ふとです、竹と云ふものは中々手の掛るもので植木屋が月六回位手を入れ油糟を遣りますが、下肥を土鉢でこしてやるのが一番傷まぬやうです、盆栽は隨分下女や車夫に命令て水を掛けさせると水撒器を落したりして樹や枝を傷めますから餘程氣を附けなければなら

ぬのです、一体此盆栽と云ふものも人に見せるには總て体裁を能くしてやらなければいきませぬ、ザットまあ此寄植の楓見た様に見せなければならぬのです。

能狂言

私の先代は麹町の宅に能舞臺を立つて能狂言を樂しみに致しました所、其頃幕府の政治と云ふものは町家に於て左様な驕奢な貴族的のことを遣りますると御法度を受けますることに爲つて居りまして、私の親父も其能舞臺なぞを立てゝ餘り驕奢のことを遣ると云ふので手錠をはめられたことがありました、夫で私の代に爲りましてから と云ふものは謠曲や能狂言などは一切遣りませぬのでございます。

福岡孝悌子

古畫

私は古書畫が大嗜きで頻りに蒐めて居りまするが、此節は丁度蟲干を遣らなければならぬものですから或時はスッカリ一ッに出して干すこともしよつたのですけれども、昨年頃から樂み半分に掛け換へ掛け換へ干して行くのです、僅かの様ですけれども殆んど三月四月位掛りまして九月下旬を越す位でないと掛け切れませぬ、それに此夏は漸く此節乾く様になりましたので是迄は、さつぱりいけませぬ、未だ餘程出さぬ方が多いのです土藏に棚を拵らへそれに入れ

て置きまするが棚の下の方は濕けます、重ねて上に行く程干きます、軸物なぞは始終おもちやにして居れば別に手入れをしなくても能く干きます、さうかと云つて餘り無茶扱ひに遣つてはいけませぬ、其中間で鄭寧におもちやにすれば、どうがこうか存して行けます。

一月上旬鎌倉で會をした時に私も少し品を出しました、一体私の嗜好と云ふものゝ始まりは文人書畫の方で日本畫なぞは俗だとか何とか云つて容れなかつたものでありましたが、段々それも遣り出す樣になりました、固より貧富の關係もありまするから始終買ふ譯に往きませぬで、文人物から變じて日本物になりました、夫故に今日では昔日の文人物は一つも存して居りませぬ、唯少しく唐畫の中に

殘つて居る位です、サウして次第に古畫の研究が盛んに爲つて來たものですから私も研究する積りで居ります。

私の藏幅して居るものは之を御覽に爲ると私の所見が分りますが是とても年々出入りがありまして元から動かぬものは半分位でありませう、半分以上は動いて居ります。

水萍處鑑藏目錄　明治三十一年三月撰定　六十有四叟水萍子自識

古畫

河内藍師六道化度圖
宅磨爲遠延命地藏圖
住吉慶恩多武峰釋迦圖
春日基光一字金輪圖
僧覺猷愛染明王圖
善財童子經歷圖
惠日坊成忍釋歌仙圖
春日隆能來迎佛中將尼圖
僧慶鍑不動三尊圖
土佐經隆高野本地曼陀羅圖

藤原信實 藥師十二神將圖
秘戲圖
宅磨榮賀 維摩居士鎌足公圖
巨勢惟久 訶利帝母圖
土佐寂濟 妙音天圖
後鳥羽院 歌仙素性法師圖

土佐吉光 大汝圖
土佐光正 來迎三尊佛圖
歌仙伊勢圖
巨勢俊久 神馬圖
春日行秀 歌仙高光圖
醍醐勝尊 春日赤童子圖

土佐長章 觀音堂緣起繪
土佐行光 弘法大師行狀記繪
歌仙圖
土佐光重 人麿圖
土佐廣周 一休禪師圖
姪子三郎圖
永春 春日興福寺曼荼羅圖

中世畫

僧一寧 山水圖
僧鐵舟 蘭竹石圖
僧一之 蠶楪圖

僧寄堂 蘭竹圖
僧明兆 羅漢圖
僧愚極 十一面觀音圖

僧淨慧 山水圖
靈彩 文殊圖
足利義持 孔子觀欹器圖

僧如拙 山水圖 寒山子浸雨圖
僧龍派 瀟湘八景圖
惠隆 山水圖
僧雲甫 唧々鳥圖
眞相 瀟湘八景圖 布袋渡水圖 一葦達摩圖
僧眞康 朝陽對月圖 遠寺晚鐘圖
僧性安 猪頭圖

僧周文 陶弘景聽松圖 西湖孤山圖
僧龍澤 山水圖
曾我宗譽 一葦達摩圖
眞能 山水圖 萱艸蜻蛉圖
道忍 呂洞賓鍾離權圖
僧祥啓 出山釋迦圖 祖師圖 陳圖南圖
支照居士 花鳥圖

岳翁 雪景山水圖 李白看瀑圖
小栗宗丹 榮華一路圖 翡翠圖
僧宗純 瀟湘八景圖 端獅子圖 屋山樹梢圖
眞藝 淡彩山水圖 紫茄白瓜圖
林居 香魚圖
休月齋啓孫 黃初平圖
長柳齋 翡翠圖

偷閑齋與悅　墨棋圖
龍登　懸瀑山水圖
僧拙宗　拙子芙臂鷹圖
等春　楊柳觀音圖
小島亮仙　雪景泛舟圖
曾我紹仙　山水圖
武田信玄　鐵鷹捕鼠圖
山田道安　布袋圖
僊可　瀟湘八景圖
與牧　布袋指月圖
芝琳賢　山水圖

雲谷畫

僧等揚　釋迦文珠普賢圖
僧等觀　巢父許由圖
雄摩居士圖　壽星圖
瀟湘八景圖　鶴鹿圖
屋山竹林圖
草畫山水圖

（以下拾五家）

僧柴庵　月棋圖
藻鯉圖
等本　山水圖
曾我紹祥　雪景山水圖
曾我吉重　陶淵明圖
墨溪采睿　山水圖

狩野正信　墨竹圖
東坡風水洞圖

狩野畫

狩野元信　狙公圖
着色山水圖
草畫山水圖

（以下二拾七家）

土佐光信　宇治川先陣圖
平家物語繪
源氏物語表紙繪

土佐畫

春日信春　名和長年圖

（以下拾家）

本阿彌光悅　唐詩卷

光悅畫

本阿彌光甫　四季草花圖

（以下七家）

僧昭乘　布袋圖
肖柏圖

釋門畫

僧信海　鷄圖

浮世畫

（以下六家）

岩佐勝以　菱川師宣
源氏絵　遊女圖
櫻狩圖

宋元明清書畫

（以下四拾四家）

采徐熙　馬遠
小倉觀虫圖　孤鶴圖

斯う云ふ風に部門を立てゝ居ります、古畫としてある所は固より古畫であるが古畫の種類で時代を別つて居る、それから次は中世畫としてあります、仕舞のには古畫とは云へない、中世畫と云ふものは漢畫と稱へて足利時代の物、又元祿時代の物もありますけれども中世畫の筋と申して居ります。

支那の古畫の行はれた元と云ふものは矢張り足利時代の頃でありま

す、即ち足利御物なぞと云ふ方から實は漢畫と云ふものもそこから這入つて來たものであります、其風が餘程行はれて其筋の古畫が行はれました、其次に伊孚九が起きて來て彼文人物が稍や多くなつた樣です、鳥渡始めに申した研究上の實際を推して御話しませうが此中世畫からのことでございます、之を御讀み下さつても分かる、私の見識はコ、に書いて有るのです、斯う云ふのがある、それはどうかと云ふて見ると狩野永納の一山の山水傳には全く一山ではないとありますが私は一山として居ります、傳へて閻次平の畫としてあります、是等は古畫備考に出て居る品です、古畫備考に出された時分は三幅としてありましたが今日は一幅ほかない、他の二幅はどうなつたか

焦げはせむかと思ふ、箱は一幅丈け現在存して居ります。

此觀音の像は張思恭と稱へますが是は甚だ疑問物です、時代が確乎分りませぬ、私は、しひて目錄には元にしてあります、都合に依ると明と云ふ人もあります、成程、明とは見らるゝ所もありますけれども迚も淸とは見られませぬ。

是は楊補之の梅として有ますが書物の上から研究して見ると一之の筆であらうと思ふ、澤庵は能く古人の畫に讃をする人でありますからそれも私の推す所であります、楊補之と云ふべき畫を日本の澤庵が和歌を書くべき筈はない、それに歌が書いてある。

夫から古人の鑑定上例へば啓書記の畫の如きものは數人同派同門のものがあつて啓書記と分つべきものがあるにも拘らずどれを見ても啓書記としてある、私の持つて居る物でさへも澤山あります。

それから又一種何がありますか古畫備考に文章にして著したものがありますが、文晁、華山などと云ふものは其時の實物を圖面に取つて出したものです、極めて斯う云ふ物は珍らしい少ないものであります、書物を作るには一品か二品を押へて作つたものであります。

土岐洞文は未だ鑑定りませぬ、今迄私の見た所では土岐富景と云ふ方が澤山のやうに思ひます、洞文は印章も一番明らかの樣でありますが元は一個でありましたらうと思ひます、後世僞印を押した誤寫から種々のものが出たのではないかと思ひます、扶桑名畫傳には一

印ちやと云ふことが書いてあります、是は餘程研究んで居る論かも知れませぬが、土岐一派の鷹が多いのを見ると一人のものとは見えませぬ、勿論洞文よりは富景の方が前に爲つて居る、併し土岐家の研究は未だ私はサウ深く致しませぬ、扶桑名畫傳には研究が立つて居る樣でありまするが未だ中々間違ひが多い、第一六つかしいのは曾我蛇足、奈良法眼などの畫いたものです、是は餘程研究が六つかしい、約まる所實物を押へて見て往きよると實は斯の如きものである と云ふことが出て來る、奈良法眼は鑑貞と云ふ印があります、私は二幅持つて居ります、是は純粹の奈良法眼であらうと思います、それは國華に出て居りますがそれには鑑貞と云ふ印が押してあります、

古畫を見るには印章は大切ですが印章ばかりでいけませぬ、書物と印章と見合せ、筆先きから用紙の工合も餘程能く見なければなりませぬ、又其入れてある箱から持て來た人間、表裝等迄隅から隅まで見なければならぬ、近時の拵へ方は實に巧みのものがありますから……○

今日の鑑定家では先づ山名貫義でせう、併し刀を鑑定して相州物とか京物とか云ふことは分りますが、何の某と云ふことは容易に分らぬ樣なもので古畫の鑑定もそれと同じく、宅摩とか巨勢とか云ふことは分りますがそれから先きの何の某と云ふことは容易に分りませぬ。

私の所藏中殊に愛翫するものと云つては實は困ります、斯う云ふ蒐め方でありますから……明治六七年頃から文人畫を蒐めましたが夫れから段々文人畫を廢して古畫に移りました、畢竟フエノロサなぞが美術保存なぞと云ふことを云ひ出してから餘程此古書畫を蒐めることが流行して來ましたので、是は詰り日本の古物を失つてはならぬと云ふ觀念から起つたものであります。

私が所藏つて居る中で一番古いのは河内畫師の畫いた天平寶字のもので丁度千百三十年計り前です夫れから覺鑁の畫いた不動も持つて居ります、覺鑁は中々六つかしい、本筆で梵字を書いたものがありますが木筆で畫いてあるから覺鑁と見ることは中々六つかしい話で

あります、足利時代迄には隨分澤山あります、私のは墨畫の不動です、長谷川等伯の極書には金岡だと云ひ、淺倉茂入の鑑定では興教大師(覺鑁)が畫いたものだと云つて居りますが、河内畫師の畫も覺鑁の畫も下の座敷に掛けてありますから御覽に入れません。

守田長祿君

古錢

私は生來古錢が嗜きで堪りませぬので六歳の時に百枚ばかり集めた錢の内に字の變つたのがありまして、ソレは清國の康熙年間に出來た錢で、韃靼文字で書いてありました、夫れが樣々古錢の嗜きになる原因でございます、丁度私は七歳の時から手習に往きまして祿にイロハは讀めぬでも古錢の字は能く讀めたのです、古錢の字が讀めるから段々手習が嗜きになりました、其時分淺草の雷門に一人の老婆が居りまして變錢を賣つて居つたが私は其老婆の所に變錢を買ひに

往くのを何よりも樂みにして、玩弄物を買ふよりは變錢を買ふ方が樂みでございました、芝居なぞに連られて行くよりも變錢を買つて貰つて遊んで居るのが嗜きでした、それで一層嗜きになりましたのは十一歳位の時でありました、或る日のこと私の家の佛壇の下にある戸棚の戸が明放になつて居つた、ソコの敷板は松で拵へてあつて其敷板の所に丁度握拳の這入る位の節穴が明いて居りました、不思議な話ですなソコに手を入れた所が其下に古錢が一つあつたのです、土の上に古錢があつたのは洵に不思議なことですな、摑んで出して見ると其時分は未だ子供のことで能く知りませぬが、朝鮮の常平通寶と云ふ古錢で今の四文錢より少し大きなもので直徑一寸四五分

もあるのです、其古錢を攫み出したが通用錢にはならぬ、通用錢ならば誰も落して置くものはないと思ひました、夫れからと云ふものは別して私は古錢と云ふものが嗜きになりましたが其後ち段々年を經りまして十三歳の時丁度私の家が類燒ました、子供ながらも其時考へましたのはマダ古錢が埋めてありはしないかと思ひまして丁度家の燒けたのを幸に思つて鳶人足を賴んで其邊の灰を取り凡そ深さ三尺位疊二疊敷ばかり堀つて見ましたが何んにも出ませんでした、して見ると前に一つ古錢のあつたのは洵に不思議のことに思ふのであります。

夫れから私は十一歳の折に質屋へ奉公に往きましたが矢張り自分の

愛する古錢ばかりは持つて往きましたのです、其質屋の番頭さんに古錢のことを話した所が番頭さんか他のものでないから持つて居るのは悪くないと言はれたのです、遂には私の話を聞き〳〵して其家の番頭さんも夫れがために古錢が嗜きになる樣になりました、質屋と云ふものは古錢なぞが隨分出るものです、ソコデ番頭さんも追々嗜きになりまして私が子供の内に持つて居つた樣なものを澤山集める樣になりました、主人も又大目に見て呉れますから番頭さんも益々熱心して古錢を愛する樣になりましたのでありますサウカウする内に私が十六か十七の時に急に暇を取らなければならぬことになりました、其譯と云ふものは私には義理ある兄がありましたが都合あ

つて其の生れた生家に歸へることになりましたから自分は奉公先より家へ戻りました所、間もなく親父に煩はれ中々古錢なぞのことに身を入れて居ることが出來なく財政の方に重に心配をしなければならぬことになりました、ソコデ私の親父と云ふものは私が十九歳の時丁度安政六年（未の年）七月二十四日五十四歳を一期として沒しました、夫れから私は古錢どころではなく家事に忙しく月日を送りました。

其後私は大層顯微鏡が嗜きになりました、今日は顯微鏡も餘程宜いものが澤山ありますが、其頃は未だ顯微鏡は和製の物ばかりであつて、舶來の顯微鏡は澤山なかつたのです、何分有つた所が高くもあ

るし、まだ年若のことであり、金錢が自由になりませぬから、古錢の不要のを賣つて其古錢を賣つた代價を以て顯微鏡を買はうと云ふ量見が起つたのです、ソコで私の家に出這入りをするものに小間物屋がありまして、私が知つて居る旗本があるから其人に見せて遣らうと親切に言つて呉れましたから其氣になりてソツクリ古錢を頼んで遣つた所が、夫が心得違ひをして持逃をして仕舞つたから私は其時愕胎りしたのであります、自分の志ざす顯微鏡も手に這入らず六歳の年から十九までの間丹誠に丹誠を盡して集めた古錢は持逃をされ、親父は死ぬ樣なことに會ひましたから是は天からして古錢を玩弄物にする故怒りを受けたではないかと思ひました、後に殘つて居るの

は三文か四文の價値しかありませぬもの計りです、私はドウにもカウにも仕方がありませぬから遂に諦らめて仕舞ひました、其内に色々財政も面白くなくなりて來ますし稼ぐ一方になりました。

ソコデ私の家には遺言として傳へてあるものがありまして、先祖代々より一代の内に何か一ッ良い藥を拵へて擴めることが遺言になつて居りまするソコデ親父が死ぬ時に私を枕邊に呼んで、『何か一つ良い藥を拵へよ、私は先代の遺言に依り神惠散と云ふ藥を拵へたからお前も何か一つ良い藥を拵へなければいかぬ』と云はれました、私は何を申すにも年若の時分であるから色々考へても善い考へは出ず今の寶丹を拵へる前に紫金丸と云ふ藥を拵へました、此藥は一生懸

命になつて拵へたのであります。

夫れから文久二年の戌年に虎列刺が大に流行して二度目の大流行でありました、第一の大流行は安政五年の午年で日本に始めて虎列刺が渡つて來た時であります、其第二の流行の時に今の寶丹を賣出しましたが、其時は寶丹とは書いてありませぬでした、此寶丹の拵へ始めと云ふのは或る時私の家へ七味の藥を買ひに來た人がありましたから私は其藥に付て不審を起して其藥を見れば和と漢と蘭の藥であつて少しも其使ひ道が分らぬのである段々其人に聞いて見ると虎列刺流行の豫防に効く藥であると云ふことでありました、夫れから其年の七月下旬になつて其藥法に依つて今の寶丹を拵へたのです、

ソコデ賣り始めたのは八月三日のことでありました、目方五分を錫に詰めて夫れを銀三匁に賣つたのであります、所が寶丹の評判が非常に知れ渡つて來て商賣の方が繁忙いので古錢どころではなく一切古錢のことは打忘れて仕舞ふ樣になりました。

私には義理ある兄がありまして今の下谷區車坂町櫻ケ香の本家で明治六年頃其家に百枚ばかりの變り錢を持つて居つたのです、其内を調べて見ると長祿通寶と云ふ古錢が一つありました、義兄から此古錢が入用ならば御前に遣るがドウだと云はれたが、只だ貰つては濟まぬと云ふて私よりは其頃裏に重と云ふ字が書いてある彼の甲州金を三百匹今の二圓五十錢位ばかりの品をやりました夫れから十日も

經つと古錢會があつて之れを古錢會に出しました所が其道の人がハツキリは言ひませぬが、此古錢は十圓の餘になるものであると云ふことを申しましたから、私は宜いものが手に這入つた是は本統に授かりものであると思ふて大切にして持つて居りました、ソコデ寶丹はドンドン都合能く賣れますに依つて店からは百包に付き今の五十錢位宛の運上を取つて居りました、所が其運上の金も大分出來たに依つて又古錢の買入れにソロ〳〵取掛りまして遂に成島柳北先生遺物の古錢を私が引取る樣になり其他三名程買潰位の勢ひになりました今の所では先づ古錢の方では有難いことには私が大關となりソコデ長祿通寶は手に這入り寶丹は思ふ樣に盛んに賣れますから四十

五歳の時に守田治兵衛を改め長祿翁と云ふ雅號を附け二十九ヶ年間稼いで此所に隱居致したのでございまする。

當世の紳士中で東京では話の出來る眼の屆くのは中澤彦七に深川本誓寺福田上人宇津宮榮太郎馬島杏雨翁故人の柏木貨一郎貴族院議員で根岸武香さん位であります、外國人なぞで嗜きな者もございます丁抹のプランセンと云ふ人は大層嗜きな樣です、年は私より若うございますが眼の屆いて居るのは中川近禮と云ふ人であります古錢會と云ふのは横濱あたりにもありますが、東京にあるのは古泉會と云ふ名義で相變らずやつて居ります、其他寛永錢研究會或は古泉品評會と云ふのもありまする。

夫れで古錢に付て考へますに國が衰へると大變錢質が粗末になつて來ていけませぬ、支那の近頃の錢と云ふものは非常に粗末になつて來て居るのです、日本でも和銅時分の古錢は洵に善かつたのです、是が有名な古い所であります。

和同開珍　萬年通寶　神功開寶　隆平元寶　富壽神寶　承和昌寶
長年大寶　饒益神寶　貞觀永寶　寛平大寶　延喜通寶　乾元大寶

此内隆平元寶と云ふのは丁度大極殿が出來ました時に出來たのです此和銅開珍より乾元大寶に至るまでの間は洵に善かつたが夫から後は段々拵へ方が下手になつて來て支那の錢を輸入し使つて居つたともありまする、ソコデ世の中が饒かである時は貨幣の通用と云ふものは洵に宜しうございます、徳川時分には大分世の中が衰へて居つ

たものと見へて遂にアー云ふ瓦解になつたのであらうと思ひます。

兎に角古錢と云ふものは詰らぬ玩弄物の樣に思ひますが理屈を云つて見れば是れ亦歷史學の一つで貨幣の研究上には洵に好いのですソコデ此古錢の文字を書きましたのは皆有名の人でございます。

和同開珍	藤原 包養	神功開寶	栗田眞人 或云小野道風		
萬年通寶	吉備 眞備	隆平元寶	桓武 天皇		
富壽神寶	嵯峨天皇 或云僧空海	承和昌寶	菅原 清親		
長年大寶	仁明 天皇	饒益神寶	春日 雄繼		
貞觀永寶	藤原 氏宗	寛平大寶	菅原 道眞		
延喜通寶	醍醐 天皇				

古市公威君

謠曲

全体私は子供の内から能が嗜きで、一番か二番子供相應の謠を敎はつたこともあつた、ソコデ面白い話は、私が留學中に、聞き覺えて多少文句が耳に殘つて居る謠を學友なぞに聽かした事があるが、何時も喝采どころか大笑ひであつた、勿論謠ひ方も無茶苦茶であつたが本統に謠つても歐羅巴人には分らぬから笑はれるに相違ない。

扨もと〳〵嗜きであつたから、何んでも一トつ稽古をして見やうと留學中にも常に想ふて居つたのだ、今の京都帝國大學總長の木下も

私と一處に留學して居たが、私が『日本に歸つたら是非一トつ謠曲を遣らうぢやないか、悪くすると是は終には無くなる樣になるかも知れぬ、ソウなるは洵に惜しいものだから』と相談したことがある、それで私が歐洲から歸つたのは明治十三年であつて十四年に同志を募つた所が、私の募集に應じたのは農科大學長の松井直吉ソレに鳩山和夫、岡村輝彦、杉浦重剛などと云ふ人達で、梅若に入門して謠古を始めた、其中で引繼いで今日迄遣つて居るのは先松井ぐらゐだが、兎も角も其當時能の衰へて居た頃に、洋行歸りの若手が五六人も揃うて入門して且鳩山などは或謠會の席で『新らしきものは吟ず良きものに限らず舊きもの必らず悪しきものに限らず、謠曲の如きは

本朝の國粹として永く存在せしめなければならぬ』と云ふ意味の演說をした事などもあつたから、梅若の爺さんは將來又謠曲の盛んになる前徵だと云ふて泣いて喜んだ。

私の舊藩は金剛流であつて、前にいふ私が子供の時習ふたのも金剛流だ、然るに梅若に入門して觀世流を習ふたのは別に意味のある譯ではない、只私の友人に梅若の弟子があつて其人が紹介して呉たからの事だが、さて習つて見ると觀世流は餘程面白いやうだ、勿論何流でも習へば面白くなるは當然だが、私一己の考へではドウも他流よりは觀世流の方が、面白い點が段々ある樣に思われる。

私が謠を嗜くは謠の文章が善いからでは無い、音曲として面白いの

だ、成程名文もあるに相違ない、松風の『月は一つ影は二つみつ潮のよるの車』なぞは善く働いて居ると三條さんが褒められたと聞たが名文と思はれる、又江口の曲留に『面白や』と轉じたなぞは名高いものだが、實に文學的に面白いやうだ、中には感心出來ない文章も隨分ある、又子供らしい所もあるが、是は却て面白味のあるものだ、古雅でチヨト眞似の出來ぬものだ、大和田建樹といふ人は大分謠曲の文章を研究した人だが、其人が『謠は中々書けぬものだ强て書くと兎角理屈ぽくなつて新聞見た樣なものになる』と云ふたが左樣だろうと思ふ、又物によつて文章が一定しない樣だ、やさしいのもあるかたくるしいのもある聞いたばかりでは何やら譯の分らない漢語

を列べたのもある、或は殊更に方言を用ひたのもある、例之ば大江山の『つぼいは山伏』とある『つぼい』と云ふは丹波地方の言葉で東京の『さくい』先磊落とでも云ふ意味ださうだ、又流義によつて色々文句が違ふが爰に面白いのが一つある、喜多流では《是は確か秀吉時分に金剛流から分れた流義と思ふ》鉢の木の『如何に世にある人の面白ふ候らん』と云ふのは『如何に世にある人の酒のふで面白ふ候らん』と諷ふ、例の『酒なくて何んの己が櫻かな』の主義だ或は天眞爛熳で面白いといふ說もあらうが、私は元來下品だから殺風景の樣に思ふ多分是は上戸の太夫が改作したのだらう、全体文章の善惡は大いに見樣によるから無闇に修正の出來るものでない惡い

と思ふて直すと却て妙味を無くする恐がある、但觀世流では大改正をやつた人がある、夫れは明和の改正本と云つて明和年間に元章と云ふ人が文章も趣向も改正したが一代限りで廢れた、尤も此改正本は今日でも餘程參考になるさうだ。

謠曲は足利時代から引續ひて名人が研究したものだから、音樂的の調査は餘程屆いて居る樣だ、實に感心だ例之ば假名の扱ひ方に就ても先假名の性質を一々調べて夫から其コムビチーションが研究してある、アカサタナの阿行の假名は口を開ひて出すが是は出ぬやうに謡はねばならぬ出ぬ假名は却て出すやうにする、又イキシチニの伊行の假名は光る僻即ち響く僻があるから是は避ねばならぬなどの

規則があつて、夫から此假名と彼假名とつゞく時はドウ謡ふ何々々の假名の三つ組合ふた時はドウとチヤンと扱ひ方がきまつて居る樣だ、又品によつて謡ひ方がある、例之ば松風の『野分汐風』を『しほかぜ』と謡はずに先づ『しやうかせ』とでも云ふやうに謡ふと奇麗になる、是はシテが松風と云ふ美人だからシテが漁夫か樵夫の時には又殊更にきたなく謡ふ樣にする。

是等の研究は屆いて居つて材料も澤山ある樣だが、何分ペダゴヂーが不充分だから原則を知つて全般を窺ふことが出來ない、教授法が備つてシステムが立てば所謂謡曲ロヂーが出來て、餘程面白いものになるだらふと思ふ。

能も同じ事だ即ち舞形も盡く研究してある一擧手一投足も苟もせぬと云ふて宜しい樣だ、陰陽とか序破急とか又五行に象るとか四季に則るとか躰の据へ方足の運び方種々あつて餘程面白いに相違ないが素人では迚も總ての原則を知る事が六つかしい又聽いても力がなければ分らない。

謠があつて舞形のないものが二種ある、一つは能が出來る樣に首尾整ふて居つて舞形のないもの即ち『鶏鵡小町』だ、尤も是は觀世流の話で寶生流には此能がある、觀世流でも昔は舞ふたものを何か仔細あつて中年止めたものと思ふ、今一つは亂曲と云ふもの、是は頭も尻尾もなく文章の面白いものに節を附けたのだ、尤も此中にも舊い本

を見ると能に組立つてあるものがある『上宮太子』『美人揃』など確に能があつた、又『定家一字題』といふものがある、是等は能はなかつたらふと思ふ是は春は霞梅櫻と云ふ樣に四季の一字の物を寄せて文を綴つた面白いものだ夫に節を附けたのだ、總じて此亂曲には一種の節と一種の諷方がある、又三曲といふものがある『東國下』『西國下』『初瀬六代』と云つて亂曲の長い樣なものだ、黑人でも餘り諷はぬ樣だ有名の已野喜松などは仲々の名人であつたが折々諷つたことがあるさうだ、私なぞは習つた事もなければ聞いた事さへもない。

私は此家では未だ發聲したことはないと云つて宜しい、御覽なさい

此の通り家込みに爲つて居て近所隣りに聞えて氣毒だからやらぬのだ、家に依つて謠ひ善いのと謠ひ悪いのとあるは疑いない、上野の櫻雲臺で障子を開け放して外の方へ向つて無頓着に謠つた事があるが聲が散つて仕舞つて一向謠つて居る氣がせぬで遂に聲を枯らした、是は初心の時分にありがちのことだ、囃子方は殊に建物に依つて非常の困難を感ずることがあるさうだ、此間濱町の三野村利助サンの別宅で會のあつた時アスコの座敷は大河の傍だから囃子が河の方に取られる、其時に此事を心得て居つた者が直樣障子を閉さしたが、後に聞たら夫でも矢張囃子方は苦しかつたさうだ、謠の方は囃子程には感じないと思ふ。

謠曲は何流でも六つかしいものには相違ないが、流義に依つて入り易いと入り悪い位の違ひはある樣に見へる、金春流などは入り悪い方であらうと思ふ習つたことはないから確かには云へぬが何分大竹を割つた樣な諷ひ方で所謂胡摩化しの利かぬ力一杯一生懸命と云ふ樣に見へる運動には最も良からう惣じて謠曲は運動になる、尤も既に肺病のある人には過激だと云ふ說があるが、普通の人なら肺病除になるだろふ、能は猶更のことだ世間運動の足らない人には大いに此道に入ることを勸める。

河瀬眞孝子

歐風の細工

私は自分の樂みに細工を遣るが、英國から持つて歸つた細工道具には中々面白いのがある、一体英國の職工の持つて居る道具は本邦へも來て居るが、英國のアマトール(好事家)が自分の樂みに箱などを拵へる道具はマー珍らしい方だ、英國の金滿家は遊んで居る者は細工道具を集めて自分は箱などを拵へて樂みとして居るが、其アマトールに適する樣に道具が出來て居る、ドウも素人が箱などを拵へるにはアマトールの器械でなければいかぬ、スグねぢれて歪形になつ

て仕舞ふ、アマトールの器械で遣れば臺も確乎して動かないからねぢれず甘く切れるのです、サウ云ふ器械は本統の職工の方にはない、マア素人が箱を拵へるに木を四枚繼ぎ合せて角を附けてやるが手を離せば直きに取れて仕舞ふからソコデ三本の指で繼合の所を押へて中から捻止をする樣な道具が出來て居る、サウ云ふ樣に素人が細工する器械は大變に多い、道具に金の掛ることは一向構はないから奇麗な道具が澤山出來て居る。

夫れから堅い木の細工物は總て本統の職工の仕事であつて是は六つかしいのである、木を切つて仕上げるには鑢を大變に用ゆる其鑢の種類は多い此通り澤山ある(とて子は十餘種の鑢を示されぬ、形狀

篦の如きあり、三角形のものあり、其目の疏なるあり、密なるあり、而して篦狀を爲せるもの〻目は松笠の如し、子は語を繼ぎて）埴太利の皇后を刺したのは鑢と云ふとだが多分コンナ三角形のものであらう、それで木に用ゆる鑢は金に用ゆる鑢よりは目が荒くつて、分けて柔かな木に用ゆるのは何れも目が荒い其目の荒いので以て擦つて形狀を造り上げる、アノ子供の玩弄の木で出來て居る馬などは骨格を能く十分に拵へるには鑿でなくつて皆鑢で遣る、格別に綿密な所の細工とか或は堅い質の樣なものは皆鑢で遣つて居ります、夫れから極く小さな鑢も種々あるが、掃除して仕上げる時分にはグラスペーパーを用ゐる、即ち硝子を粉にして紙につけたので、其硝子

の粉の大小に依つて番號が附いて居つて、始め荒いのを仕上げる時分には一番とか二番とか云ふ樣な粉の荒い所を用ひ仕舞の仕上げには小さいのを用ひます。

それから此が鉋だ（とて三四種の鉋を示さる、臺木日本のより大きくして重く中の一つは臺の裏に鐵板を貼りて尤も重し而して其使用は皆日本と反對に向う〻突きて削るなり）鋸も向う〻突くのだ（二三種の鋸其目皆日本のと反對なり）だから歐洲の者は日本は何事もアプサイド、ダウン（顚倒）だと云つて居る、鋸で珍しいのは此だ（示されたるを見るにU字形を爲したる鐵條に柄を附しありて、U字の兩端に細き絲の如き鋸を挾み以て板の中央に欲する所の形を

くり抜くに用ゆるなり）錐も此通り左の手で上から押へ右の手で把手を廻すから一寸もねぢれが來ぬ、是は職工は用ゐぬで、アマトールが用ゆるのだ。

アマトールの器械で一番要用なのは臺である、臺は螺子で開く樣にしてあるが、開いて物を挾んでキチンと留める樣になつて居る、これでシッカリ物を挾んで細工をするのだから、ドンナ素人でも出來る、英國から歸る時に持つて歸つたが濕氣の爲めねぢれて螺子が役に立たなくなつた、ソコで種々其ねぢれを取らうとしてみたが本邦ではドーしてもいかぬ、さういふ臺は本邦では出來ぬから其儘に放つてある、其臺は素乾かない木で拵へたものではなからう、十分濕

氣を脱いて拵へたのだらうが、本邦は濕氣が多いから到頭ねぢれて仕舞つた。

ドウも日本は濕氣の多い國であつて又始めから濕氣を拔いて拵へたものは丸でない、北京などは乾燥の強い處であるから、日本の漆塗の器具を持つて往くと皆破れて仕舞ふ、箱なぞに入れて仕舞つてあるものも皆其中で壞れて仕舞ふ、伊太利邊へ先年漆細工の物を持つて往つたことがあるが、別して善いものまでボロボロに壞れた、日本の漆細工が西洋に往つて不評判なのは細工の粗末と云ふ說があるけれども、そればかりではない、一番乾燥の度合が違ふのにあらうと思ふ。

それから歐洲では板の厚サや又廣サに付いて元方が大凡是は何々に向くものであるとか、斯う云ふ向きのものであるとか云ふて伐り出して來て材木屋は夫を取入れてやるのですから、材木屋が木挽をすることはしない、材木屋は木の傷みとか反りの出來ない樣に保護するのが仕事である、ソコデ材木屋は木の濕氣を取るために蒸汽を掛けて遣りはしないかと思ふが蒸汽を掛けて遣れば費用も嵩むとであるが兎に角水氣は餘程能く取つてある、畢竟するに木に早く腐れが來るのは濕氣を含んで居つて其濕氣が段々蒸發して拔けて出る中に外から又吸收する、吸收したのは又送り出されるからである、一体木は洵に細い孔から成立つて居るものであつて其細い孔へ持つて往

つて水氣が吸收される、吸收されては送り出され出たり這入つたりするから自然に水氣のために木が傷む基ゐになるのである、彼の水の中に立つて居る杭などの水際が一番腐るのは其譯である、だからドウも濕氣を能く拔くとが第一である、最初に一遍に水氣を拔くと木のためには本統に善い、蒸汽で濕氣を取れば費用も掛るから木を立つて置いて雨の防ぎをして成丈空氣の流通を能くして自然に濕氣を拔くのが一番能いと思ふ、濕氣を十分初に拔いて置けば第一に木のねぢれが來ぬ、サウ云ふとが重に材木屋の仕事となつて居る。

亞米利加では値の高き木などで物を拵へては其物の値が高くなつていかぬから、其木を薄く剝ひで夫れを貼り付けて立派に拵へ上げる、

恰度函根細工みたやうに拵へるが、それが大きい木を其儘削つたのだからドシナ大きい物でも出來る、實際見たことが無いから知らぬが、何でも蒸汽力で大きな鉋で削るのだらう、其薄く削るのはイクラでも薄く削るが、其削つた薄い板はクル〳〵と卷いて寒暖の度合の宜い所に保護して置いて注文に應じてドシナ品でも出す、函根細工は小さいが亞米利加のは大きいのが出來る。

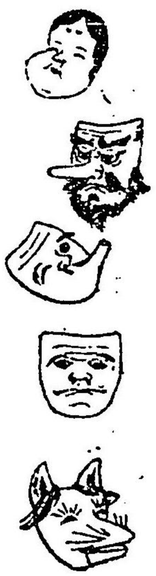
夫れから歐洲の膠は日本などのより餘程製造に念が入つて格別なものである、極く精製して色も十分澄んで居る、サウして使ふ時分には大概一晝夜位水に浸して置いて十二時間以上も火に掛け自然に溶解さしてそれを使ふ、サウでないと膠の効力と云ふものは十分にな

くつて取れ易くなるから膠の使方には餘程念を入れることになつて居る。

糊は着ける品物次第で混淆物が違ふのです、物に依てつは大變にや、かましいもので私は英國から持つて歸つたアイボレー（象牙）の細工物が壞れたから日本橋の其道の人の處へ持つて往つて相談した所がこれは甘くは出來ますまいが出來る丈けのことはやつて見樣と云ふから頼みました、夫れから出來上つた所が間もなく取れて仕舞つたのです、總て糊は其品物々々によつて違はなければならぬ歐洲で糊の種類は百二三十種もあつて大變多くございます、是は化學上から來るので此品物に使ふには何と何との混淆物がよいと云ふことに意

を用ひなければならぬ。

アマトールは彫刻もやる、彫刻には木にも石にも金にもやるが、石は蠟石位であまり堅い石はやらぬ、金に彫刻するには鞴も入る、鞴もアマトールの用ふるのが別に出來て居る、私も銅などに彫刻することをやつても見たが鞴を買つて歸ることを止したから此方では遣らぬ。



松平正直君

刀劍

私の刀劍を愛するのは詰り昔の武士道から來たので、維新前迄は何處の藩でも侍が事理を辨ずる年齒になると爭ふて好い大小を拵へたものであつて私の廿歳の時、御用人を勤めて居つた稻垣と云ふ人があつた、丁度五十歳位の人であつたが大變刀劍が好きで鑑識に富み越前で稻垣と云へば誰知らぬものはない程の人でありました、固より金持ではないが質を置いても名刀なら購ふと云ふ樣な誠に厭味のない人であつた、私は此人より刀劍の講釋を聞いて好きになりまし

て越前の康繼、備前の清光などを差した時などは實に非常に嬉しかつた其後私は江戸に上府しましたが、スルト又藩の權大參事をして居つた小笠原と云ふ人があつて是も上府して居つたので種々刀劍の話を聞き一層其執心を深くした樣な次第でありますが、竟に王政維新以後文物の進歩よりして制度改革の爲めに明治四年廢刀令を布かれることに爲りました、其頃私も仕官して居つたので如何に刀劍が好きでも廢刀令の手前に對して好きな顏も出來ず一時中絶した樣な姿になりましたが、其後私は仙臺（宮城縣）の知事を拜命して赴任した所が丁度大沼少將が聯隊長を勤めて居つて此人も非常に刀劍が好きで會なぞを立つて居つた、それで私も元々好きな道であるから話

が合つて其會に進んで入會した、入會はしたが未だ刀劍を鑑定るとに付いては學術的に研究が積むで居らぬから『入會はしたがドウモ鑑定が出來ない』と云つた所が大沼が『何にッンナ六つかしいとはない、御前位の素養があれば、ちきに分かる』と云つた、それで此會は始の内は月に三回もありまして、會の度びに私は刀の鑑定、國々の癖、國々の掟、流派と云ふ樣なことを實に本阿彌よりは尙詳しく大沼から敎はりました、所が明治十年の西南の騷亂の起つた時などは大沼などの主張で將校には日本刀を佩ばしむると云ふ風に爲つて彼の拔刀隊などは中々驍名を轟かしたもので、未だ此日本刀は或る場合に依つては武器の一として存在せしむることの必要を感ぜし

むる樣になつた、それから又一方には外國との交際も開けて來て外國人も日本に入り込んで段々日本の古美術を蒐集する樣に爲つて古劍の類も大分好い物が外國人の手に渡たる樣に爲つたものだから『是はいかぬ、此儘放擲つて置いては好い物は向ふに持つて行かれる』と云ふ所謂愛國心から又世間で刀劍を蒐めるものが出て來る樣に爲りました、何を云ふにも十年前後は日蔭町の須屋などには澤山刀劍があつたが恰も鉈刀やら名刀やら區別が付かぬと云ふ樣な風であつたものだから同好の士は非常に殘念に思つて居つた、其後大沼は廣島に轉任しましたが、其後任に佐久間（今の大將）山澤（故中將）などが來ましたが孰れも刀劍は好きであつたものであるからズット遣つて居つたが私はトウ〳〵熊本に轉任するとに爲つた、熊本に行つて見ると熊本は又仙臺の樣なものではない、流石に武國と云はれる國柄丈けあつて斷續はしたが、以前から刀劍の會があつて中々鑑識の高い人が居つて、中にも小笠原寛と云ふ細川家の執政をして居つた人がありまして、此人は幽齋の流儀の犬逐物などに達し刀劍の大家であります、それで私も此會に這入つて熊本に居る內は熄めずに遣つて居りましたが中々樂みのものです。

此刀劍を愛することは日本の古物保存の趣意にも適ふて、又審美上から論じても餘程審美の意味がある、實に日本刀と云ふものは其燒刃の匂ひを見ると精神を爽快ならしむ所がある、日本の美術繪畫も

澤山ありますが千年以上經つたもので今日現存して居つて實用を爲すものは刀劍の外ないと云つても過言でない、伯耆泰綱などは千三百年にもなる、行平の樣な古備前物でも三百年以上になりますからな。

私は熊本に在任中色々刀も見ましたが熊本には正宗は一本もありませぬ、イヤ熊本計りではありませぬ、ドウも正宗と云ふものは眞物は多くない樣である、それで普通、刀劍を愛する人と云へば必ず正宗貞宗を賞揚する樣であるが、私は正宗にはドウモ信を置けない、志津一派や鄕則重などに爲ると動もすれば正宗に化け易いから中々油斷はならぬ、私の考へでは成程正宗と云ふ人は有つた人に違

ひなからうがドウモそれ程實際の鍛錬はない人と思ふ、詰り一文字から長船と爲つてから正宗は時好に投じ又時弊を矯めて子弟を敎育したものであつて、中々其門下生の養成と云ふとに付いては力のあつたものだが實際の刀を鍛たふと云ふとは左程でなかつた樣に思はれる、其證據には德川幕府の頃將軍より諸侯に賜はる刀劍の中に正宗在銘の物は一本もないと云つて宜い位である世に所謂正宗と稱して働いて居るものは多く折紙で働いて居るのでありますが、其折紙も寛永より元祿享保頃迄の本阿彌の折紙なら宜しいが其外の折紙では餘り感心しませぬ、又當に正宗十哲と稱しましても廣正位までは鑑識も屆きますが秋廣以上となつては中々危いものであります。

それで私はドウか今日の刀匠家をして永く其業を保たしめて其跡を絶たしめぬ樣にするのは我々の道樂仕事でなく國民の義務と云つても宜しかろうと思ふ位であります、併し唯刀匠家を存置しやうと云つても業にならぬければ生活が出來ませぬから日本の朝野共に上流の人は外國への贈物には年月日在銘の刀を太刀拵へにして送つたならば非常に外國人も喜びませうと思ひます、昔は武士の戰功ある者に其君から賜はるものは感狀とか器物とか色々のものを與へたものであるが與ふるに名刀を以てすれば受くる者は身命城廓にも換へて珍重した位のものでありまず、ドウか文明の今日の世でも斯云ふ風に外國との交際も進んで來た上は外國へ贈り物は二百圓も三百

圓も掛けて太刀拵へにして贈つたなら誠に彼我の幸で古物保存上結構のことであらうと思はれるのです。

大臣以上では伊藤侯も好きで善く今村(長賀)などに鑑て呉れと云つて呉れるさうです、松方伯や岩崎男なども澤山持つて居る樣ですがマア眼の鑑く人は田中宮相です、黑人では今村、別役、大沼、益滿などと云ふ人です私は平十郎の養子の本阿彌成善に研ぎや手入れをさせて居ります、私の愛翫して居るものと云ふても別にありませぬが先づ只今所持して居る刀劍の中で重なるものは

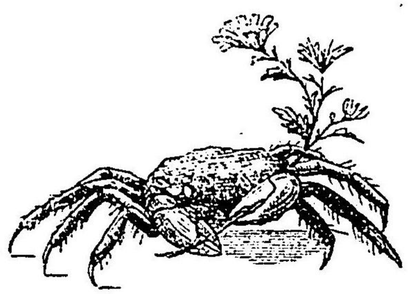
古備前友成、同正恒、備前一文字、宗吉、備中古青江康次、

來國行、相州行光、備前一文字信房、

短刀にては

相州新藤五國光、筑州左、備前倫光、備前兼光、行光

位のものであります。



野村素介君

書

私は書の專門家ではありませぬが元來私は色々骨董書畫の癖があつたのです、夫から何時となく唐人の書が面白いと云ふ感じを起して格別師と云ふものはありませぬでしたが唐以前の有名の法帖は暗雲蒐めました、宋元以下の書は餘り好みませぬでした、中々書と云ふものは心では餘程馳せる樣ですけれども思ふ樣にはいかぬもので、始終自分の書いた字を後で見ると厭になる心がします、私は最初十七八歳の時でした東京に參りましたが其頃小島成齋と云ふ備後

り掛つたときのものは殆んど楷書然としたものが多い、褚遂良の楷書などは丸で隷の筆法でありますテ、例へば一の字などの斯う跳ねた所は……一体ドウモ楷書と云ふものは唐に限る樣です、古い所は今の純然たる楷の体裁にならぬがらです、宋になると餘程一變して來た、發達したと云へば發達したのですが餘程崩れて來たのです、草行になると是はドウモさう規則立つて態度が極らぬものであるから銘々の變化で縱横走筆一定の極りはないのであります、何を云ふても書の上の巧拙と云ふものは六づかしいもので明人あたりは餘程發達して居りますが清に這入ると丸で見られるものはない樣に思ひます。

畫も矢張り左樣です、清朝に這入つてからは小細工流に發達して優美の所は見えますが丹精の所がない、謂はゞ建築上の書院とか表座敷の玄關とか云ふ楣付の極つた座敷は明が好いのです、それからモウ一つ進んで書齋とか茶席とか云ふ數寄屋造りの極く輕妙優美に附出したのは清朝です、蘭竹花卉の輕妙の所は明では出來て居らぬけれども九尺床のある御座敷向きのものには清朝の腕では乏しい、詰り清朝に爲つてから意氣たとか何とか云ふのは段々下層の方に進んだのです、書も矢張りさうです、書は唐で止まつて居る素人好きのするのは唐人よりは明人の方が向きます、ドウモ支那人が書を能くするのは先天的に文墨に長じて居るからのことで、筆を持たしては樂

福山の城主阿部伊勢守に仕へた人で大の古法帖家がありました、苅谷掖齋なども此人に就いて學んだのであります、夫で私は國から冷飯で益田と云ふ太夫に隨伴して參りましたので、始終小島の所に通ふて敎へを受けました小島は其頃七十歳位で中風に罹つて居りました、私も二年計り通ふて行きましたが其後私が國に歸つてから其人は間もなく死にました、當時は雪城米菴などの江戸風と云ふ書家が多かつたのですが、其中で彼の人ひとりは獨立して始終古法を遣つて居つたのです、其書風は柳公權の骨格に則とり虞世南の態度を學んだものであります、いま内田義修と云ふ七十近い老人がありますが、夫で私は小島が故人に爲

つてからは自分で色々古法帖の臨寫などをして居りました、小島と云ふ人は書家計りではございませぬ、中々奇骨のある人で勤王心にも富んで居つた人でありますから阿部伊勢守にも大分重く用ひられました彼の嘉永年間米國の軍艦が江戸に參りまして國書を提したに付いて幕府から、其答書を出すときには、林大學頭が其文を草して小島が其字を書いたのです、書などはドウでもよかりさうなものだが其時分には外國に贈る書にも書手を擇んだものです、兎に角小島と云ふ人は梁川星巖みた樣な一種狷介不羈の人であつた。

今の楷書は昔の隷書で漢時代には隷書が通用文字であつた、夫から今のは八分と云ふので篆に近いものである、清朝邊に隷から楷にな

り掛つたときのものは殆んど楷書然としたものが多い、褚遂良の楷書などは丸で隷の筆法でありますテ、例へば一の字などの斯う跳ねた所は……一体ドウモ楷書と云ふものは唐に限る樣です、古い所は今の純然たる楷の体裁にならぬからです、宋になると餘程一變して來た、發達したと云へば發達したのですが餘程崩れて來たのです、草行になると是はドウモさう規則立つて態度が極らぬものであるから銘〻々の變化で縱横走筆一定の極りはないのであります、何を云ふても書の上の巧拙と云ふものは六づかしいもので明人あたりは餘程發達して居りますが清に這入ると丸で見られるものはない樣に思ひます。

畫も矢張り左樣です、清朝に這入つてからは小細工流に發達して優美の所は見えますが丹精の所がない、謂はゞ建築上の書院とか表座敷の玄關とか云ふ楣付の極つた座敷は明が好いのでず、それからモウ一つ進んで書齋とか茶席とか云ふ數寄屋造りの極く輕妙優美に附出したのは清朝です、蘭竹花卉の輕妙の所は明では出來て居らぬけれども九尺床のある御座敷向きのものには清朝の腕では乏しい、詰り清朝に爲つてから意氣たとか何とか云ふのは段々下層の方に進んだのです、書も矢張りさうです、書は唐で止まつて居る素人好きのするのは唐人よりは明人の方が向きます、ドウモ支那人が書を能くするのは先天的に文墨に長じて居るからのことで、筆を持たしては樂

なものです、隨分大ざつぱいの所はありますが……日本人は書を上手に書くと云ふてもドウモ和風がありまし。

今日追々西洋の科學が進歩して來たので書の意義を知らぬ人などは西洋の文字と同一視して格別重きを置いて居らぬ樣ですけれども、元來漢字は西洋文字とは生れも違ひますし性質も違ひ聲から來るものあり形より來たるものありて、とても其道に這入らぬものが外見した計りでは詰らぬ、ドウでも宜い樣なものですが中々研究して見ると靈妙のものです、

日本で有名な本朝三蹟と云ふのも義之から出て素唐に據つたもので す、アノ時分は一種日本の和樣が混つて居つて世尊寺などの楷書も

日本風であります、兎に角日本では空海であります、併しアノ空海の作つたと云ふ假名も元は一種の草書で支那の法帖に出て居りますから子、空海に次いでは道風とか神護寺の鐘の銘を書いた藤原俊行、アノ楷書などは丸で唐人徐浩其儘ですね、御歴代の天皇樣でも嵯峨天皇は御能筆であらせられまして、空海を師とせられた樣であります、一種の寫經流であります。

古書の眞贋を分つことは古畫を鑑るのと同じことで其人の自然持つて居る性、癖の現れて居る所を鑑れば分ります、德川時代に爲つてから唐風の字を善く遣つたのは徂徠であります、徂徠は有名の古學者ではありますが學問の點に到りては獨歩とは云へない外に仁齋